2009年5月号・84号 -

昭和30年代の道路の主役 オート三輪

ドアもなくハンドルもオートバイと同じ棒形

起、伝馬町の酒店前のオート三輪。配達などによく使われた（『尾西市史』より）

昭和 30 年代前半、身近な自動車と言えば貨物輸送用の「オート三輪」だった。当時の写真を見ると、街を走っている車は原動機付自転車、オートバイ、そしてオート三輪が写っている。

自家用車はまだ一般的ではなく、自家用車が街でよく見られるようになるのは、昭和30年代後半から40年代にかけてのこと。いわゆる「マイカー時代の到来」と言われるようになってからである。

オート三輪とは、車輪が三つ付いたトラックの通称。安価で小回りが利き、多くの荷物が積めて、さらに当時の日本の一般的な道路事情だった「悪路」に強かった。当初はドアもなく屋根は幌（ほろ）で、ハンドルもオートバイと同じ棒形だった。ハンドルが丸くなったのも屋根が金属になったのも、かなり後のことである。

オート三輪は二輪に一輪足しただけの単純な構造のため、多くのメーカーが生産した。各メーカーは排気量を抑え、小型車規格となるように車種を設定。エンジンも軽量化やコストダウン、さらに粗悪ガソリンへの対応のため、単気筒あるいは2気筒が主流だった。

オート三輪は戦前からあったが、隆盛を誇ったのは昭和 30 年代。モータリゼーション黎明期で、簡易な輸送手段として多くの業種で使用された。小回りが利くことから、道幅の狭い市街地や林道での材木運搬などで重宝されたという。

「カーブで転倒」「乗り心地が悪い」などで消滅

しかし、カーブで転倒しやすいため高速走行に不向きなことや、居住性の悪さから、オート三輪は次第に敬遠されるようになる。価格面でも四輪トラックとの差が小さくなり、競争力を喪失。昭和 40 年に「三輪車運転免許」が廃止されたことも大きかったようだ。

さらにこれに追い打ちをかけたのが、トヨタ自動車の「トヨエース」に代表される安価な四輪トラックの登場。オート三輪メーカーの多くは、四輪トラックを生産の主流に切り替え、昭和 30 年代後半になると、東洋工業（現マツダ）とダイハツの二つのメーカーが生産を行うのみとなった。

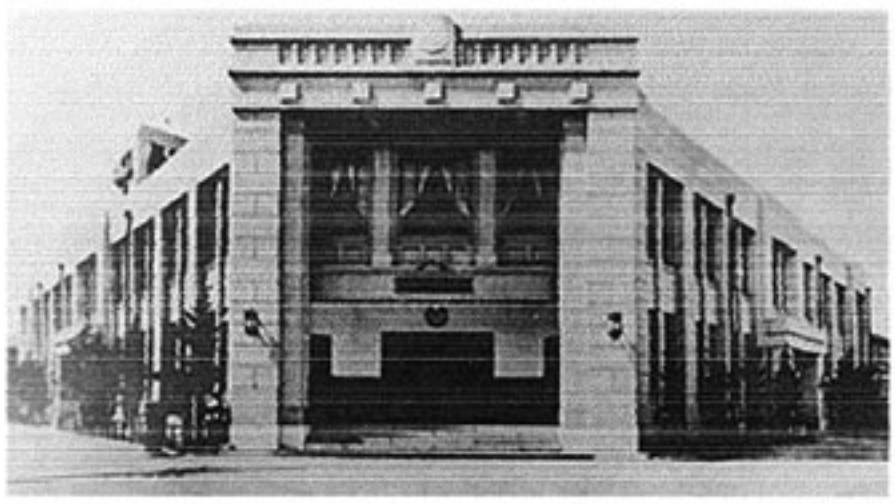
そして昭和 47 年にはダイハツが生産を中止。2 年後には東洋工業も生産を中止し、オート三輪は市場から姿を消してしまった。

日本ではほとんど見られなくなってしまったオート三輪、しかし東南アジアなどでは今でも活躍するその姿を見ることができる。

2009 年 3 月号・82 号

一宮近代化の象徴　一宮市役所旧庁舎と西分庁舎

2 面「チューネン断定団」でも触れられているように、一宮市役所の立て替え計画に伴い、旧庁舎と西分庁舎の一部保存の動きが進められている。そこで今回はこの二つの建物について紹介してみよう。



県内最初の鉄筋コンクリート庁舎
一宮市役所旧庁舎

竣工当時の一宮市役所旧庁舎。現在は無い左側の塔は、火の見やぐらとして使われたという

日本で鉄筋コンクリート造りの建築が建てられるようになったのは、1923（大正 12）年の関東大震災からといわれる。地震によってそれまでのレンガ造り建築の多くが倒壊。以後、大きな建物は、この震災でその強度が証明された鉄筋コンクリートで建てられるようになった。

現在の旧庁舎が建てられたのは 30（昭和 5）年 10 月。愛知県では初めての鉄筋コンクリート庁舎だった。21（大正 10）年に県内で四番目の市となった一宮市が、「市政 10 周年」を記念し、10 年の準備期間を経て建てたものだ。

設計したのは、県の営繕課技師だった松本善一郎。コの字形の 2 階建てで、中庭に突き出た部分に議場が設けられた。当時はまだ鉄筋コンクリート建築の経験が浅かったため、コンクリートの型枠を外す際は恐る恐るだったという。

竣工時には、花火が打ち上げられ、ちょうちん行列が練り歩いた。庁舎前では鏡開きが行われ、集まった市民に酒がふるまわれたという。

「東海の近代建築の父」鈴木禎次が設計

西分庁舎

一方の西分庁舎は、1924（大正 13）年の建設。旧名古屋銀行（後の旧東海銀行、現三菱東京 UFJ 銀行）の一宮支店だったものを、80（昭和 55）年に市が購入した。

当時の典型的銀行建築で、設計したのは東海地方の「近代建築の父」といわれた鈴木禎次。鈴木は帝国大学工科大学造家学科を卒業後、欧州諸国を留学。帰国後、名古屋高等工業学校（現名古屋工業大学）教授となり、建築科を創設した。鈴木は初代建築科長に就任。大学で教べんをとるかたわら、数々の近代建築を設計した。

鈴木の設計した建築は今も各地に残

されている。名古屋市の旧名古屋銀行本店や鶴舞公園の噴水塔と奏楽堂。半田市のミツカングループ本社研究所や桐華学園本館。岡崎市の岡崎信用金庫資料館などが主なものだ。

＊＊＊＊＊

二つの建物は、一宮の近代化を象徴している。地域の文化遺産でもある。これらの建物を保存することは、地域の足元の歴史を見つめ直すことにもつながるだろう。

いーちいまむかし

2009年1月号・80号 -

身も心も温まる庶民の“社交場”

ふろ

仏教と共に伝わった入浴の習慣

現存する最古の浴堂。東大寺の大湯屋。大釜でわかした湯を「鉄湯船」と呼ばれる鉄製の浴槽に入れていた

高温多湿の風土や清潔好きな国民性からか、日本人はふろ好きといわれる。しかし、入浴の習慣が広がったのは6世紀の仏教伝来からである。それまでは川や海で体を洗い流すのが一般的であった。

仏教では「仏に仕える者は汚れを落とさなくてはならない」ことが説かれていた。また、入浴は「七病を取り去り、七福が得られる」ともされていた。このため寺院には浴堂が備えられ、これを一般の人に無料で開放する施浴（せよく）がひんぱんに行なわれるようになったという。

施浴の習慣は、鎌倉時代になるとさらに盛んになり、「功徳ぶろ」などと呼ばれて一般家庭にまで拡大。裕福な家では、人を招いて入浴後に酒食をふるまう「ふろぶるまい」が行われるようになった。また地方では、村内のお堂でふろをわかし、入浴後は持参の酒で宴会をする「ふろ講」が流行したという。

明治時代までは混浴だった銭湯

入浴料をとるいわゆる「銭湯」が登場したのは、平安時代末期からという。江戸時代初めにはすでに地域ごとに銭湯が開業していた。当初のふろはいわゆるサウナ。浴槽にひざをひたす程度に湯を入れ、上半身は湯気で蒸す仕組みだった。今のように首までつかるようになったのは江戸時代の後期からといわれる。

当時の銭湯には、ふろ上がりの客に三味線や酒のサービスをする湯女（ゆな）がいた。湯女は昼間はふろで客の背中を流し、銭湯が終わる夕方以降は、いわゆる私娼として客をもてなしたという。

銭湯は当初より「入り込み湯」とい

う男女混浴。これは明治政府によって法律で禁止されるまで続けられた。大正時代になると銭湯も近代化。木製だった洗い場や浴槽はタイル張りになっていった。

銭湯数はピーク時の二割に減少

銭湯がピークを迎えたのは昭和 40 年ごろ。当時、愛知県内には 812 軒の銭湯があったという。しかし、このころから家庭ぶろが急速に普及。銭湯は相次いで廃業していくことになる。現在では一宮市の 11 軒を含め、166 軒にまで減ってしまった。

その一方で増えてきたのが健康ランドやスーパー銭湯。こちらは公衆浴場料金に関する法律の規制を受けないため、料金の上限がない。

地域の人たちが手軽な料金で、文字通りの「裸のつき合い」ができる銭湯。日増しに寒さが増す中、銭湯で身も心も温めようではないか。

2008 年 11 月号・78 号 -

幾多の変遷へて

豊島半七氏の 1億円の寄付で建設

一宮市立豊島図書館

「読書の秋」である。活字離れが叫ばれる昨今だが、まだまだ読書を趣味に挙げる人は多い。そこで、今回は一宮市立豊島図書館の歴史を振り返ってみたい。

昭和 41 年、開設当初の豊島図書館。向かって左側には児童施設「一宮こどもの家」があった

愛知県の近代図書館は、明治 13（1880）年、名古屋市の愛知県師範学校の構内に設置された付属書籍室が最初だといわれている。和漢書約 12,000 冊、洋書約 500 冊を備え、閲覧料は無料。年間 1,122 人が来館したという。その後、同 18 年に名古屋区共立書籍室が、同 42 年には名古屋通俗図書館が開設されている。 大正期に入ると、各地で図書館の創設が盛んになる。一宮でも大正 4（1915）年、御大典記念事業として松降通の一宮高等女学校の仮校舎内に一宮町立図書館が設置された。これが現在の豊島図書館のルーツである。

その後、市立一宮図書館と館名を変更して、昭和 6（1931）年には人形町の市役所付属施設に移転。ここで初めて、図書館が一般市民に公開された。それまでは女学校の生徒か教師が利用するだけだったのである。

図書館はその後、公園通一丁目の一宮商工会議所、同二丁目の借家と場所を転々。さらに昭和 20 年 7 月 28 日の一宮空襲で官舎が焼失、閉館を余儀なくされてしまった。

戦後になると昭和 20 年 11 月には早くも川田町の旧熊沢女学校 2 階で図書館は再開される。この時の図書数は、市内の小学校に疎開されていた約 5,700 冊だけで、戦前の 3 分の 1 程度だった。

しかし当時は市民が活字に飢えていた時代。不便な場所にもかかわらず利用者は多かったという。またこのころから図書館では、講演会や展示会などの文化行事も積極的に行うようになった。

昭和 25 年に図書の無料公開を原則とする「図書館法」が制定。これを受け、一宮図書館でもそれまであった閲覧料金や館外貸し出しの際の保証金の徴収を廃止した。昭和 27 年には大宮町の市体育館の一部を改装して移転している。

このころには蔵書も戦前並に回復。貸し出し文庫の開始や児童室の設置など、利用者の便を図る施策を相次いで打ち出している。一宮では織物工場などで働く若年労働者が多く、会社への貸し出し文庫は需要が高く、大変喜ばれたという。

現在の豊島図書館が開設されたのは昭和 41 年。糸商で元一宮商工会議所会頭だった四代目豊島半七氏の遺志で寄贈された 1 億円を元に建設されたものだ。豊島図書館という館名はこのことに由来している。こうして鉄筋コンクリート造り 3 階建ての「一宮市立豊島図書館」が完成した。

地域の文化向上に大きな役割を果たしてきた図書館。読書は生涯にわたる楽しみでもある。さあ図書館へ足を運び読書にいそしもう。

2008 年 9 月号・76 号

「超空の要塞」B29 爆撃機、二回にわたり一宮を空襲

「空爆殉難記念碑」

空襲犠牲者、追悼のため建立

一宮市桜の大乗公園にある「空爆殉難記念碑」

一宮市桜にある大乗公園の一画に「空爆殉難記念碑」というモニュメントが立っている。先の戦争での空襲による犠牲者を追悼する目的で、遺族らが昭和 33（1958）年に建立したものだ。この場所に建てられたのは、ここがもっとも犠牲者が多かったためだという。

以前も本欄で触れたが、先の戦争でのアメリカ軍の空襲は昭和 19 年末から始まり、連日、B29 爆撃機の大群がこの地方を襲い、多くの犠牲者を出した。

一宮に対する空襲は、昭和 20 年の 7 月、二度にわたって行われた。一回目は 7 月 13 日の夜、市街地に大量の焼い弾が投下された。本格的な空襲は 2 回目で 28 日の夜。約 260 機の B29 爆撃機が市の中心部を波状攻撃した。

この空襲によって市街地の大半は焼失。一万戸以上が被災した。さらに真清田神社をはじめ、市内の主な施設も破壊され焼失した。空襲による死者は

727 人、負傷者は 4,187 人にのぼった。

『体験記』がつづる空襲の記録

一宮市が編さんした『空襲・戦災の体験記』（昭和 47 年刊）には、当時の模様が次のように書かれている（要約）。

「B29 の爆音と共に、空に花火のような赤い炎が点々と落ち始めました。間もなくあちこちで火の手が上がり、見る見るうちに周りは炎に包まれました。逃げる人が街のあちこちで父母を呼び、わが子を呼んでいます。全市は大火災となり、地獄の様相を呈して一夜のうちに焼け野原と化しました」

「炎ともうもうたる白煙の中、逃げまどっていると、道に黒いものが三つ、四つと横たわっていました。黒光りした人間の焼死体でした。反対方向から来た人に聞くと、一丁目の方を指して『向こうには、もっとたくさんの人が真っ黒になって死んでいる』と言いました。現在の大乗公園のあたりで、そこには丸裸で正視できないほど無残な数十体もの焼死体がありました」

空爆を実行した「超空の要塞」

この空襲を行ったのが「超空の要塞」と呼ばれたアメリカ軍の B29。開発に当時のお金で約 30 億ドルを投入したという、大型戦略爆撃機である。

B29 は「三千キロ以上の行動半径」を持ち、「高度一万メートル以上での飛行が可能」なほか、「酸素マスクのいらない与圧装置」「小型の高性能照準器」「専門の航空機関士の搭乗」など、当時の最先端技術を結集したものであった。

この「超空の要塞」が、高射砲の弾も届かない、戦闘機もなかなか到達できない超高空から、爆弾や焼い弾の雨を日本各地に降らせたのである。先の戦争での日本人犠牲者は約 310 万人。そのうち 50 万人（広島・長崎の原爆犠牲者含む）は空襲の犠牲者だという、その空爆の大半を担ったのが B29 であった。

2008 年 7 月号・74 号 -

日本最多の神社　なぜ多いのか？

―――八幡社

日本には小さなものまで含めて約 14 万もの神社があるといわれている。その中で一番数の多いのが「八幡（はちまん）社」である。4 万社以上あるといわれ、次に多いのが「稲荷社」。俗に「八幡稲荷八万（はちまんいなりはちまん）」（両社合わせて八万社という意味）などといわれる。この日本一数の多い八幡社だが、実はその神の正体はよくわかっていない。では、この八幡神が、全国に広がったのはなぜなのだろう？

大仏建立で躍進

八幡神社（千秋町浮野）

全国にある八幡社の総本山は、大分県宇佐市にある宇佐八幡宮である。だが、その起源はよくわかっていない。

由緒書によれば、その神は応神天皇（西暦 400 年ごろの 15 代天皇）の霊で、欽明天皇 32（571）年に宇佐の地に出現し、神亀 2（725）年に社殿を建立したのが始まりとされている。しかし「八幡神はもともとこの地方の土着の神だった」というのが、一般的な見方だ。

八幡神は一地方神でありながら、その名前は早くから中央に知られていた。宇佐には呪術にたけたものが多く、天皇の病気を治すことなどを目的に、これらの呪術師が朝廷に招かれたためだという。こうして、朝廷は宇佐八幡宮を守護神としてあがめるようになったといわれる。

宇佐八幡宮の中央進出が加速するのは奈良時代になってから。東大寺の大仏建立の際、工事が難航したとき、「神々をひきいて成功させる」という託宣により問題解決をはかったためだという。これは宇佐の呪術集団が、当時としては最新の金属加工技術を持っていたためと考えられている。

これをきっかけに、宇佐八幡宮は国家の重大事に関与するようになる。天皇の即位や国家に異変があると、その報告や祈願のための使い（宇佐使）が宇佐に派遣されるようになった。

さらに平安時代に入ると、僧行基が宇佐八幡を京都の石清水（いわしみず）に勧請（かんじょう）し、大社を創建した。これが京都における八幡信仰の拠点となり、次第に宇佐八幡宮は伊勢神宮に次ぐ地位を確立していったのである。

戦の神は源氏から

時代劇などで武士がよく「南無八幡大菩薩」と唱えるように、一般的に八幡神は「戦（いくさ）」の神と思われている。これは清和源氏が信奉していたためで、源頼朝が鎌倉幕府を開いた際には、現在の鶴岡八幡宮が創建されている。こうして八幡神信仰は、武士の間に急速に広まっていったのである。

さらに武士は自分の領地にも八幡社を建てたため、民衆の間にも八幡信仰が浸透。農民の間では、疫病や害虫を取り除き豊作をもたらす神として信仰されるようになった。

また、八幡神は早くから道教や仏教と結びついてきた。そのため、天応 1（781）年には「大菩薩」の神号がおくられ、東大寺をはじめ、各地の寺院の境内に鎮守の神として勧請されている。

どうも八幡神は、その何とでも結びつく性格から広く普及したようである。その実体があいまいであるために、かえっていろいろなものと結びつきやすかったのかもしれない。

2008 年 5 月号・72 号

静かに釈迦の誕生を祝う――― 花祭り

妙興寺の厳粛な「降誕会」

妙興寺の仏殿と今年の降誕会の模様

4月8日、今年も一宮市大和町にある妙興寺の仏殿で、厳粛な雰囲気の中、僧侶たちによって「降誕会」が執り行われた。

「降誕会」は釈迦の誕生を祝うもの。4月8日が釈迦の誕生日と伝えられることから行われる年中行事である。釈迦の誕生日は一般的には「花祭り」などと呼ばれ、ほかにも「灌仏会（かんぶつえ）」「仏生会（ぶっしょうえ）」などとも呼ばれる。

言い伝えでは、釈迦が花園で生まれた時、空から竜が舞い降りて香湯をそそいだところ、釈迦が起きあがり、「天上天下唯我独尊」と言ったという。この話から「花祭り」には花を飾り、甘茶をそそぐのが習慣となっている。

波乱に満ちた釈迦の生涯

ところで釈迦というのは本名ではなく、部族の名前である。本名はゴータマ・シッダルータ。インド北部の釈迦族の王子として生まれたことから、こう呼ばれている。

当時のインドは戦国時代。国土も人心も荒れ果て、悩んだ釈迦は29歳の時、国を捨て、王位や家族も捨てて出家。そして35歳の時、ブッダガヤの菩提樹のもとで悟りを開き仏陀となった。仏陀とは古代インドで使われていたサンスクリット語で「悟ったもの」という意味。仏教の呼び名はここからきている。

その後、釈迦は45年にわたってインド各地で伝導活動を行い、80歳の時、故郷に近いクシナガラの地で息を引き取った（「入滅」という）。この時、頭を北に向けていたことから、今でも死者の頭を北向きにする「北枕」の習慣が残っている。

波乱に満ちた釈迦の生涯

さて釈迦と言えば、愛知県には有名な施設がある。本物の釈迦の遺骨をまつる名古屋市の「覚王山日泰（にったい）寺」である。覚王とは「悟りを開いた人」の意味で「釈迦」を示すものだ。

日泰寺は日本で唯一の超宗派寺院。どの宗派にも所属せず、各宗派が協力して運営にあたる、他に類を見ない寺院である。もちろん檀家は存在しない。日泰寺に釈迦の遺骨が納められた経緯は次のようなものだ。

明治31（1898）年、イギリス人、ウィリアム・ペッペはインドとネパールの国境近くで古墳の発掘中、各種の宝物とともに人骨を納めた一つのつぼを発見した。つぼには古代文字が刻まれており、解読したところ、それが釈迦の遺骨であることが判明した。

インド政府はこの遺骨を仏教国のシャム（現在のタイ）王室に寄贈。王室はその一部を、やはり仏教国であるセイロン（現スリランカ）とビルマ（現ミャンマー）に分与。これを当時の駐シャム公使が知り、「ぜひ日本にも分与してほしい」と誓願した。

その願いはかなえられ、明治33年、遺骨は日本に渡り、遺骨を納める寺院の建設が決まる。建設地は、官民一体の大誘致運動によって名古屋となり、明治37年、日本とシャムの名前を冠した超宗派寺院「覚王山日暹（にっせん）寺」（その後、シャムが国名をタイと改めたため「日泰寺」へと改称）が誕生したのである。

……○……

春の一日、波乱に富んだ釈迦の生涯に思いを寄せつつ、合掌。

2008 年 3 月号・70 号 -

一生にただ一度の思い　どうしても忘られず**正岡子規が見染めた女性**

見染塚

一宮市木曽川町のＪＲ木曽川駅の近くに「見染塚」としるされた碑が立っている。「俳聖」といわれた正岡子規が、この地で出会ったある女性とのエピソードをもとに、平成 6 年に建立されたものだ。折しも来年秋には、子規が主役の一人として登場する「坂の上の雲」（司馬遼太郎原作）がＮＨＫスペシャルドラマとして放映される。そこで今回は、この正岡子規と見染塚について触れてみたい。

野球殿堂入りした「俳聖」

ＪＲ木曽川駅近くにある「見染塚」。平成 6 年に建立された

正岡子規は慶応 3 年、愛媛県松山で生まれている。本名は常規（つねのり）で子規は俳号。新聞社に務めながら俳句や短歌の革新に尽力したことで知られる。

しかし子規は肺結核によりたびたびかっ血。新聞社退社後も病苦と闘いながら雑誌「ホトトギス」を主宰するなどしたが、明治 35 年、34 歳の若さで亡くなっている。

子規は一方で、野球を日本に紹介したことでも知られている。自らも楽しみ、俳句や随筆などに書いて野球の普及に貢献した。「打者」「走者」「直球」など、子規による訳語は現在も使われており、これらの功績から平成 14 年には野球殿堂入りもしている。

木曽川停車場での出会い

一方、「見染塚」建立の発端となった女性との出会いについて、子規は明治 32 年に発表した随筆「旅」の中で次のように書いている。

「～それよりも不思議は、一生に只一度の思ひは残る木曽川の停車場とて、田の中に茶屋三軒、其一軒に憩いて汽車待ち合はせしに、丸顔に眼涼しく色黒き女、十六ばかりに何の見処もなきが、これ又如何にしてか心の奥迄しみこんで、ここに一夜を明かす言ひ草まだ考へつかぬ内に、汽車が参りました、お急ぎなされませと、彼女かいがいしく我が荷物先に持ちて走るに、我もおくれじと汽車に走りこみける。其無邪気な顔どうしても今に忘られず。大方三人の子はあるべし～」

この文章は明治 24 年 6 月、子規が旅の途中に木曽川の停車場で汽車に乗る際に駅前の茶店で休憩をした時の出来事をつづったものだという。

実在した「子規が見染めた女性」

その後、この女性は実在するのか、

するとしたら誰なのかについて大正 8 年、一宮市浅井の郷土史家・森徳一郎氏が調べたところ、木曽川町黒田の松本わくさんであることが判明した。

それによると、わくさんは明治 4 年生まれで、子規が見染めた当時はまだ独身で 21 歳（子規は当時 25 歳）。近所では「色は黒いが美人」という評判だったという。わくさんはその後、子規に見染められたなどとは知らず、千葉県の医師と結婚し 50 歳で亡くなっている。子どもがいなかったため遺骨は郷里に返され、この地で葬られたという。

その後、子規が見染めた女性の実在を知った地元では、大正 8 年にわくさんの絵はがきが作られたりした。また昭和に入ると見染塚の建立が呼びかけられ、新聞などで大きく報じられたが実現しなかった。その後も塚の建立話は何度も持ち上がるが実らず、結局、平成の時代になってようやく実現したのである。

2008 年 1 月号・68 号

孝行息子伝説　その真相は？

－佐吾平（さごへい）の遭難

美濃路に立つ、孝子石碑の謎？

「孝子佐吾平遭難遺跡」の碑

昭和 30 年、地元住民によってそれまでの木製の碑から建て替えられた

一宮市起にある一宮市尾西歴史民俗資料館で『Let's Minoji Walking』と題した美濃路散策のパンフレットを販売している。美濃路の旧跡などを地図入りで紹介したもので、街道ウオーキングの参考になるガイドマップだ。

美濃路は東海道など五街道に付属する脇街道として江戸時代に整備された。東海道の宮（熱田）から桑名までが「七里の渡し」という海路だったため、陸路で京都へ行けるようにした道である。

美濃路は宮で東海道と分かれ、名古屋、清洲、稲葉、萩原、起、墨俣、大垣の宿を経て垂井で中山道に合流している。遠回りになるものの、より安全な陸路として船を嫌う人や女性などの旅人に利用された。

また初期には将軍上洛の際に利用されたほか、参勤交代制確立後は、北陸や西国の大名行列もこの道を利用している。そのため、美濃路は東海道に劣らないほどにぎわったという。

ところで、この美濃路の街道沿い、日光川に架かる萩原橋の西側手前に一つの石碑が立っている。ある言い伝えに基づいた「孝子佐吾平遭難遺跡」の碑である。

孝行息子殺害で異例の処分？

それは天保年間（1830 ～ 44）、播州明石藩の藩主・松平斉宣（なりのぶ）が参勤交代で江戸へ向かう途中での出来事だった。萩原宿の馬方だった佐吾平が暴れ馬を取り押さえようとして、この大名行列の前を横切ってしまう。このため佐吾平は、「無礼打ち」とし

て切り殺されてしまった。

佐吾平は盲目の母の面倒をよく見ていて、孝行息子として知られていた。そのため周辺の人々はこの死をいたみ、街道わきに小さなほこらを建てたという。

さらにこの話には後日談がある。事件が徳川御三家の尾張藩内で起きたため、尾張藩が明石藩に強く抗議したのである。藩の面目や「一方的な無礼打ちは許し難い」との判断によるものだという。

その結果、明石藩は領地の半分を没収。さらに尾張藩領内を通行する明石藩の大名行列は、夜間のみ、しかも葬式の服装でしか認められず、名古屋城下では、船で堀川を上下させられた。その後、昼間の通行が許可されたものの、昼間でも提灯をつけ、夜装でのみ認められたという。

強者への怒りが生んだ伝説？

以上が「佐吾平」にまつわる言い伝えだが、実はこの話を裏付けるような資料は存在しない。しかし完全なフィクションとも言えないようだ。この話は尾張一帯に伝わっており、浪曲や芝居にもなっているからである。

明石藩の行列が葬式の服装でというのも、天保 15 年の行列が藩主の「御遺骸上り」だったことからのようだ。これらのことから、まったくの作り話ではなく、何らかの事件が土台にあったものと思われる。大名行列での横暴など、強者・武士に対する弱者・庶民の怒りが、何らかの事件をきっかけに話を増幅させたというのが真相かもしれない。

なお、当初木製だった「孝子佐吾平」の碑は、地元住民によって「孝子佐吾平遭難遺跡」として昭和 30 年に建て替えられた。戦後の新憲法制定時の国務大臣・金森徳次郎が碑の文字を書いたという。

2009 年 4 月号・83 号 -

学校建築の近代化　木造から鉄筋コンクリートへ

卒業式のシーズンである。今年も多くの子どもたちが学舎を巣立ち、新たなスタートへ向け一歩を踏み出していったことだろう。そこで今回は、前号のを引き継ぐ形で、学校建築について触れてみたい。

大正後期に登場　鉄筋コンクリート学舎

かつての起小学校講堂。昭和 5（1930）年の建設で、当時としてはこの地域で最大の建築物だったという。昭和 59 年に解体された

日本の近代教育制度は、明治 5（1872）年の「学制」公布から出発している。それとともに日本の学校建築も近代化の道を歩み始めた。当初の校舎は大半が木造だったが、そのスタイ

ルは和風や疑似洋風、和洋折衷などの時期を経て、明治の終わりごろには定型化がなされたという。

大正期になると、「義務教育年限の拡大による生徒数の増加」「教育内容の変化による特別教室の設置」「高等教育の学校増設」などから、学校建築の拡充期となった。この傾向は、施設の老朽化による立て替え需要もあって、戦争が拡大する前の昭和初めまで続いた。

木造中心だった日本の学校建築に鉄筋コンクリート造りが登場するのは大正の後期。公立小学校で初めて鉄筋コンクリートの校舎が建てられたのは、大正 9（1920）年の神戸市立須佐小学校と横浜市立寿小学校だといわれる。

関東大震災で鉄筋コンクリート校舎が増加

鉄筋コンクリート造りの学校が各地で建てられるようになったのは、大正12年に起きた関東大震災以後のこと。震災でその堅牢さが証明されたため、鉄筋コンクリートで学校を建てることが推奨されたからである。

被災した東京では、震災から昭和 4 年までの 6 年間に、100 以上の小学校で鉄筋コンクリートで校舎が再建された。しかし愛知県では鉄筋コンクリート造りの学校はあまり建てられていない。理由はコスト。鉄筋コンクリート造は木造の 2 倍の費用がかかったためである。そのため父兄などの寄付によって、鉄筋コンクリートの学校を建てたところが多かったという。

昭和 5 年に建設された起小学校講堂も、その一つ。当時の写真を見ると、木造校舎の中にひときわ目立つモダンなデザインの講堂が建っている。建設時にはこの周辺で最大の建築物だったというが、残念ながら昭和 59 年に解体されてしまった。

鉄筋コンクリート造りの学校は、戦火が拡大する昭和 10 年代に入ると次第に減少する。資材統制などのためで、再び建てられるようになるのは戦後になってからであった。

2009 年 2 月号・81 号

神社の守り神　狛犬の正体は？狛犬は獅子のこと？

【左の写真】口を閉じた「吽（うん）形」の狛犬。神社に向かって左側にある。
【右の写真】 口を開いた「阿（あ）形」の狛犬。神社に向かって右側にある
（一宮市真清田・真清田神社境内で）

今年も初詣には各地の神社は、参拝客でにぎわったことであろう。ところで神社といえば、その特徴を示すものに狛犬（こまいぬ）がある。この狛犬、犬と付いているものの、その正体は獅子（ライオン）だという。

かつてインドやエジプトでは、王宮の門前に獅子の像を置き守護神としていた。これが中国に伝えられ、寺院などの守り神としてとらえられるようになり、さらに日本に伝わったという。

狛とは「高麗（こま）」のことで朝鮮半島を指すが、この場合は、外国一般を表わすらしい。すなわち狛犬は「外国の犬」というような意味になる。日本ではライオンになじみがないため、これを「異国の犬」と考え、狛犬としたというのである。

平安時代には飾りとして、間仕切り家具の重しなどに利用されていた。小さな置物で、このころは狛犬と獅子が混同されており、口を開いたものを「獅子」、口を閉じたものを「狛犬」と呼んでいたという。

これがその後、次第に大型化。神社などの守り神として鎮座するようになり、狛犬という呼び名に統一されていった。

左右で形の違う狛犬

神社に飾られた二頭の狛犬は、よく見ると左右で違っている。口を開いたものと閉じたものがあるのだ。一方は「阿（あ）」と、もう一方は「吽（うん）」と言っているという。

「阿」は梵語（サンスクリット語・古代インドの言語）で口を開いて出す最初の音、「吽」は口を閉じて出す最後の音をあらわしている。つまり二つで対になって世界の始まりから終わりまで、すなわち世界全体をあらわしているというのだ。

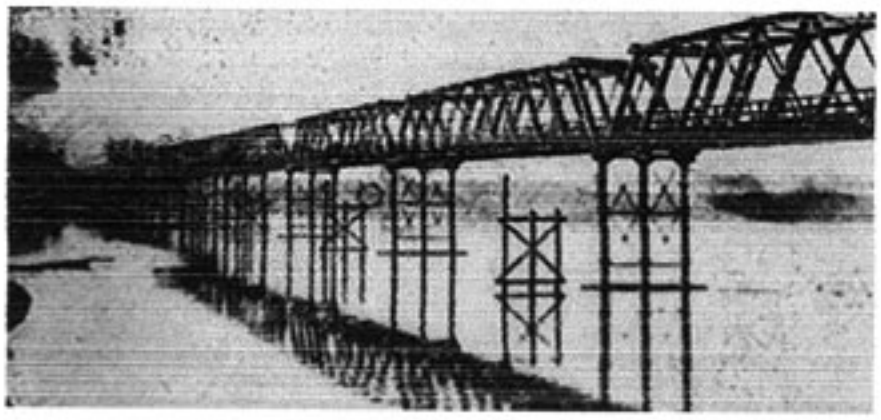
一般的には、神社に向かって右が口を開いた「阿形（あぎょう）」の狛犬で、左が口を閉じた「吽形（うんぎょう）」の狛犬。「阿吽」の対になったのは、仁王像などの影響を受けたものだという。よく言われる「あうんの呼吸」も、ここからきている。

ところで狛犬以外にも稲荷神社のキツネに見られるように、神社にはさまざまな動物が守護神として鎮座している。キツネ、ウシ、ウマ、ヒツジ……、さすが八百万（やおよろず）の神々をまつる日本ならではの光景である。

2008年12月号・79号

岐阜～一宮から江戸へ
木曽川橋と鮎鮓（あゆずし）街道

最初は木橋だった木曽川橋



大正 10 年ごろの初代木曽川橋。長大な木橋で、明治 43 年に竣工した

岐阜と名古屋を結ぶ県道 14 号線は、別名「岐阜街道」とも呼ばれる。江戸時代からの重要な道で、明治期になっても幹線道路として大きな役割を果たしてきた。明治 18（1885）年には国道に指定されている。

しかし岐阜県笠松町と一宮市北方町の間を流れる木曽川については、明治に入っても江戸時代同様、渡船に頼るしかなかった。ここに橋が架けられたのは、明治の後期になってからである。

架橋を要望する声の高まりを受け、建設が決定し、明治 43 年に初代の木曽川橋が完成した。橋は木製で、幅約

5.5 メートル、長さ約 460 メートルという当時としては長大なものであった。

橋はその後、橋脚にコンクリートが補強されるなどの手直しはされたものの次第に老朽化。そのため昭和 10（1935）年には、木橋の下流に新たな橋の建設が決まった。

こうして昭和 12 年、現在も残る鋼鉄製の木曽川橋が完成した。橋は幅約 11 メートル、長さ約 462 メートルで、当時各地で造られたタイドアーチ橋であった。昭和 39 年には上流側に歩行者のための歩道橋も設置されている。

その後、この橋を通る岐阜街道は昭和 37 年には国道 22 号線となったが、昭和 44 年の名岐バイパス（現在の国道 22 号線）開通により、現在の県道へと変更されたのである。

長良川の鮎を鮓にして将軍に献上

ところで、この岐阜街道は、かつて「鮎鮓街道」とも呼ばれていた。この呼び名は、江戸時代に尾張藩が長良川の鵜飼いで捕れた鮎を「鮎鮓」にして江戸まで運び、将軍家に献上していたことに由来する。この鮎鮓を運ぶ道として使われたのが岐阜街道だったため、鮎鮓街道と呼ばれるようになったのである。

始まりは慶長 8（1603）年、徳川家康、秀忠への献上から。以来、毎年 5 月から 8 月までの間、毎月 1 回（後年には月 6 回）江戸城に届けられたという。

鮎鮓は岐阜町のお鮓元から加納問屋を経て、笠松問屋で受け継ぎ、一宮問屋場へ、そして江戸へと送られた。1 回に 4 つの桶（1 つの桶に鮎の大 10 尾、小 20 尾）を一つの荷にまとめ、3～5 つの荷にして運んだという。

岐阜からスタートし 46 の宿場をへて江戸までに 5 日ほどで運んだというが、夏の暑い時期での作業は大変だったと思われる。笠松の問屋跡に立つ石碑には「鮎鮓の桶かつぎ受けわたし人びとは江戸への道をひたに走りき」ときざまれており、その苦労を今に伝えている。

2008 年 10 月号・77 号

明治の漢詩界に多大な影響
森 春濤
漢学塾「有隣舎」の出身

森春濤（1819～1889）

以前、本欄で幕末から明治にかけ、一宮で開かれていた私塾、有隣舎（丹羽郡丹羽村・現在の一宮市丹羽）について触れた。有隣舎は漢学（儒学）を教える数少ない私塾で、ここからはさまざまな人材が巣立っている。その代表格の一人が、森春濤（しゅんとう）である。

春濤は文政 2（1819）年、現在の一宮市本町四丁目で眼科医の家に生まれている。 10 歳の時より、叔父の医師の下で医術を学ぶが、このころから医学より漢詩に興味を示すようになる。

その後、実家の眼科医を手伝いなが

ら、親の許しを得て、有隣舎で漢学を学ぶ。有隣舎では後に漢詩で活躍する大沼枕山（ちんざん）らと机を並べるが、ここでの影響は大きく、春濤は医学より漢詩に熱中するようになった。

44歳で医業を捨て漢詩人に

春濤は 20 歳で親の後を継いで眼科医となる。しかし詩作への情熱を抑えることはできなかった。医業のかたわら作った漢詩が認められたこともあり、文久 3（1863）年、ついに医者を廃業し、漢詩人の道を歩むことを決意する。

名古屋の桑名三丁目（現在の中区丸の内二丁目）に移住し、「桑三吟社」を設立。漢詩人としてスタートしたのである。この時、春濤はすでに 44 歳になっていた

この名古屋時代の門下生には永坂石（せきたい）や丹羽花南、田中不二麿、奥田香雨らがいた。名古屋での生活は明治 7（1874）年まで続くが、永坂石らの招きで、春濤は東京へ移住する。春濤 56 歳の時であった。

東京では住居の摩利支天横丁からとった「茉莉（まり）吟社」を設立し、漢詩の指導にあたった。翌年には『東京才人絶句』を編集刊行。松平春嶽や山内容堂ら 166 家の漢詩を収め、大きな賞賛を受けた。また漢詩の専門誌『新文詩』も創刊し、春濤の名前は広く知られることとなった。

親子二代で漢詩壇をリード

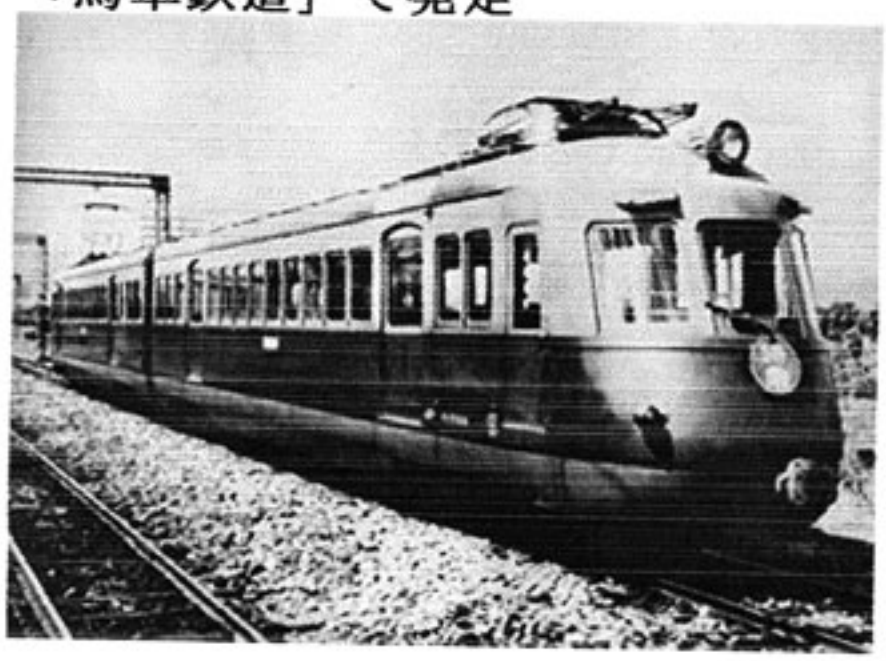
春濤は、こうして日本の漢詩壇をリードする存在となった。春濤の詩は明治の文学に多大な影響を与えたといわれ、その著作は当時の文人や学者の愛読書となった。

あとを継いだ子の森槐南（かいなん）も漢詩に才能を示し、後に帝国大学の講師や文学博士となっている。『唐詩選評釈』などの多くの著書も残している。

一方、有隣舎出身の大沼竹渓（ちくけい）や大沼枕山らも漢詩で活躍した。そのため有隣舎の名前は東京でも知れわたることとなった。また、数多くの漢詩人を輩出したことから、一宮を中心とする尾張地方は、「詩国」とまで呼ばれたのである。

2008 年 8 月号・75 号 -

日本で二番目の電気鉄道
合併で日本三位の私鉄に
―――名鉄
「馬車鉄道」で発足



昭和 12 年に導入され、長く活躍した流線形電車

以前、本欄で尾張地方最初の私鉄・尾西鉄道について触れた。尾西鉄道は後に名鉄に買収され、名鉄の中ではもっとも古い営業路線、尾西線となっている。今回はこの名鉄について触れてみたい。

名鉄の歴史は、明治 27（1894）年設立の「愛知馬車鉄道」に始まる。当時は鉄道といえば蒸気か馬車の時代。しかし、本当の目的は電気鉄道を走らせることであった。

その後、社名を「名古屋電気鉄道」と改称。そして明治 31 年、名古屋の笹島～県庁間で電気鉄道を開業した。これは、日本最初の電車を走らせた京都電気鉄道に次ぐものであった。以後、同社は名古屋市郊外へも路線網を拡大。またこのころ、岐阜で「美濃電気軌道」が、また知多半島で「愛知電気鉄道」が相次いで開業している。

大正期に入ると、名古屋市内路線の「公営化」の声が高まってくる。このため名古屋電気鉄道は、名古屋市外の路線を分離して大正 10（1921）年に旧「名古屋鉄道」を設立。名古屋市内の路線は名古屋市に譲渡した。

最大の課題「電圧」

その後、名古屋鉄道は大正 14（1925）年に前述した尾西鉄道を買収。さらに昭和 5（1930）年、美濃電気軌道と合併して社名を「名岐鉄道」へと変更した。

この名岐鉄道と愛知電気鉄道が合併し、新会社「名古屋鉄道」が発足したのは昭和 10 年のことであった。当時は不況で鉄道事業はどこも業績が伸び悩んでおり、合併による新会社設立には、こうした背景があった。

合併後の名鉄にとって最大の課題は、西部の旧名岐鉄道路線と東部の旧愛知電気鉄道路線の接続であった。合併の 2 年後には連絡工事が始まり、昭和 16 年、地下駅の「新名古屋駅」がオープン。西部線と新名古屋駅がつながった。

さらに戦時下の昭和 19 年に東部線と新名古屋駅がつながり、東西の路線がようやく接続された。しかし線路はつながったものの、金山駅を境に電圧が異なっていたため、客はここで電車を乗り換えなければならなかった。

電圧問題は戦後にまで懸案として残され、ようやく昭和 23 年に電圧工事が完成。新岐阜～新名古屋～豊橋間が一体的に運営されるようになった。こうして、総営業距離約 445 キロという私鉄第 3 位の路線網を持つ今日の名鉄の基礎が固まったのである。

2008 年 6 月号・73 号

1940 年と 1964 年
2 つの東京オリンピック
一宮も走った聖火リレー

旧尾西市内を走る東京オリンピックの聖火ランナー（1964 年）

チベット問題を背景に聖火リレーでのトラブルが話題となったが、いよいよ北京オリンピックが目前である。ところで、中高年世代にとってオリンピックといえば、やはり 44 年前の 1964

年に開催された東京オリンピックが思い起こされることだろう。日本初であるとともに、アジア初のオリンピックであり、日本の戦後復興を世界に印象づけた歴史的なイベントであった。

18 回目となる東京オリンピックには、93 の国、地域から男女合わせて 5,133 人の選手が参加。20 競技 163 種目で技を競い合った。その結果、日本は 16 個の金メダルを含む計 29 個のメダルを獲得。国別金メダル獲得数でアメリカ、旧ソ連に次いで第 3 位となった。

公募で決まった標語は、名古屋の中学生による「世界は一つ東京オリンピック」。テーマソング「東京五輪音頭」は三波春夫の歌で大ヒットを記録した。また開会式の行われた 10 月 10 日は、その後、国民の祝日「体育の日」（後に 10 月の第 2 月曜日）となり、その記憶が引き継がれたのである。

大会に先立って聖火リレーも行われた。ギリシャで採火された聖火はマレーシアやタイなど東南アジアを経由して日本に到着。聖火ランナーが日本国内を走行し、一宮市内でも聖火リレーが行われた。ちなみに聖火の最終ランナーは、広島に原爆が投下された 45 年 8 月 6 日に広島県三次市で生まれた 19 歳の陸上選手であった。

幻の東京オリンピック

ところで日本初のオリンピックは、実は戦前の 1940 年に東京で行われるはずであった。31 年に東京の議会がオリンピック誘致を求める決議を採択。翌 32 年に開催候補地として立候補したのである。

この 40 年開催のオリンピックには、東京のほかローマとヘルシンキが立候補。36 年に行われた国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）の投票で東京開催が決定した。

しかし翌 37 年に盧溝橋事件が勃発すると事態は一変する。日中戦争の泥沼化を背景に、オリンピック開催に否定的な動きが広まっていったのである。すでにイギリスやオーストラリアなどから東京大会中止を求める声が上がっており、アメリカも大会のボイコットを示唆していた。

このため日本政府は 38 年、オリンピック開催を返上することを閣議で決定。こうして日本初のオリンピックは幻となってしまったのである。

すでにローマも辞退していたため、代わってヘルシンキでのオリンピック開催が決まった。しかしこれも 39 年に第二次世界大戦が勃発すると中止に追い込まれ、さらに 44 年の大会も中止となった。次にオリンピックが開催されたのは、戦争が終わった 48 年のロンドンオリンピックからであった。

2008 年 4 月号・71 号

尼寺で始まった日本の保育事業
農繁期託児所から保育園へ

日本の「保育の父」— 筧雄平

現在の押場保育園に設置された、一宮最初の保育園「一宮共存園」（昭和２年）

卒業、卒園シーズンである。子どもたちの新たな旅立ちにエールを送る一方、「少子

高齢化」が叫ばれる中で、今回は保育園の歴史を振り返ってみたい。

日本の保育園は、農繁期に子どもを預かる「農繁期託児所」から始まっており、その先駆けは、鳥取県鳥取市の筧（かけひ）雄平（1842 ～ 1916）だとされる。筧は家業の農業のほか、酒造や金融にも手を広げる事業家であった。

当時、農家の子どもは、親が働いている間は子守に預けられるのが普通だった。しかし、子守がいなかったり、危険な場所に放置されることも多かったという。この状態を見た筧は「何とかしなければ」と考え、明治 23（1890）年、近くの尼寺に子どもを集めるための援助を開始した。

その後、筧はこの尼寺に保育施設を建設。明治 32 年に「託児所」の看板を掲げたのである。託児所は無料で、運営はすべて筧の自費でまかなわれていた。これが日本の保育園の出発点だといわれる。

その一方で筧は、公益事業に多額の寄付をしていた。県庁に学資金を寄付したり、周辺の小学校に寄付をするなどしていた。自宅の土蔵を改造して図書館をつくり、ここに自分の蔵書を集め村民に提供したりしたという。

筧のこうした活動は調査記録が作られるほどだったが、託児所の設置は調査記録には残されていない。託児所設置は、当時の世間の関心をほとんど集めなかったのである。しかし誰も注目しなかった託児所事業が、後に筧の事業の中で最も重要なものとして伝えられることになった。

寺院の農繁期託児所からスタート

この地方での保育の歴史もお寺の本堂などを使った農繁期託児所から始まっている。旧尾西市では大正 15（1926）年、起本願寺で保育園の前身が開設されている。旧一宮市でも同年、「一宮保育園」が設立。その後、昭和 2（1927）年に県に移管され、「一宮共存園」として現在の押場保育園の敷地に設置されている。

農繁期託児所は、大正末期から昭和にかけて全国で増大している。そのため昭和 13 年には社会事業法が制定され、その管理下に入っている。農繁期託児所は、主に寺院や公民館などで開設され、女性や民生委員などが保育を担当したという。

戦後になると、昭和 22 年に児童福祉法が制定。「すべての児童は等しく、その生活を保護され、愛護されねばならない」として、託児所は保育園という名前に統一され、新たな時代を迎えた。

旧一宮市でも児童福祉法が施行された 23 年には、押場、野口、真澄、西成の四つの市立保育園と私立の尚正保育園が認可を受けている。また同じころ、後に一宮市に合併する浅井町のみずほ保育園や今伊勢町の今伊勢中保育園なども認可を受けている。

……○……

お寺の本堂などを使った農繁期託児所から始まった保育事業。百年以上にわたる保育の歴史は、同時に働く母親の歴史でもあった。働く母親のための支援制度拡充を望みたい。

2008 年 2 月号・69 号

歴史に名を残した婿養子と養女

長政とねね　浅野公園（浅野長政

公宅址）

一宮市浅野に「つつじ祭」で知られる「浅野公園」がある。周囲が掘で囲まれたこの公園は、戦国時代の武将・浅野家の屋敷があったと伝えられる場所で、大正 6（1917）年に地元住民の手によって整備されたものだ。ところで、この浅野家には、後に有名になる二人の人物が婿養子、養女としてかかわっている。豊臣秀吉を支えた武将・浅野長政と秀吉の妻・ねね（「おね」ともいう）である。

浅野家の婿養子から豊臣政権の重職へ

――― 長政

浅野公園内にある「浅野長政公宅祉」の碑

浅野長政は天文 16（1547）年、西春日井郡北野で安井重継の子として生まれている。その後、叔父で織田信長に仕えていた浅野長勝の次女・ややと結婚。男子のいなかった浅野家の婿養子となり、家を継いだのである。

この長勝が養女としたのが、後に秀吉の妻となるねね。つまり秀吉の妻と長政の妻は姉妹ということになる。ねねは長勝の姪（めい）にあたり、当時、秀吉と恋愛中であった。しかし、ねねの親が反対したため、長勝が養女にして秀吉に嫁がせたのである。

こうした経緯もあって、長政は秀吉に仕えるようになり、賤ヶ岳（しず）の戦いや朝鮮出兵などで活躍。さらに行政的な手腕も発揮して太閤検地などに取り組むなどした。その功績から、甲斐 22 万石を与えられ、石田三成らとともに秀吉を支える五奉行にも選ばれている。

秀吉の死後は、徳川家康暗殺の容疑で家督を息子・幸長に譲って隠居。慶長 5（1600）年の関ヶ原の戦いでは、浅野家は家康側につき、その功によって和歌山 37 万石を与えられ、慶長 16（1611）年に 65 歳で死去している。なお、息子の一人・長重の子孫が赤穂へ移り、そこから「忠臣蔵」で有名な浅野内匠頭（たくみのかみ）が出ている。

反対を押し切って秀吉と恋愛結婚

――― ねね

一方のねねは、尾張の杉原定利の次女として生まれ、永禄 4（1561）年に親の反対を押し切って秀吉と結婚。当時としては珍しい恋愛結婚で、秀吉の身分はそのころ非常に低く、結婚した時点では、ねねの方がずっと上であった。

結婚後は秀吉の立身出世を陰で支えたが、二人の間には子どもがいなかった。そのため、親類縁者などを家臣として重用した。加藤清正や福島正則などが有名である。秀吉が関白になると北政所（きたのまんどころ）と称するようになった。

その後、慶長 3（1598）年に秀吉が死去すると高台院と称し、わずかな女

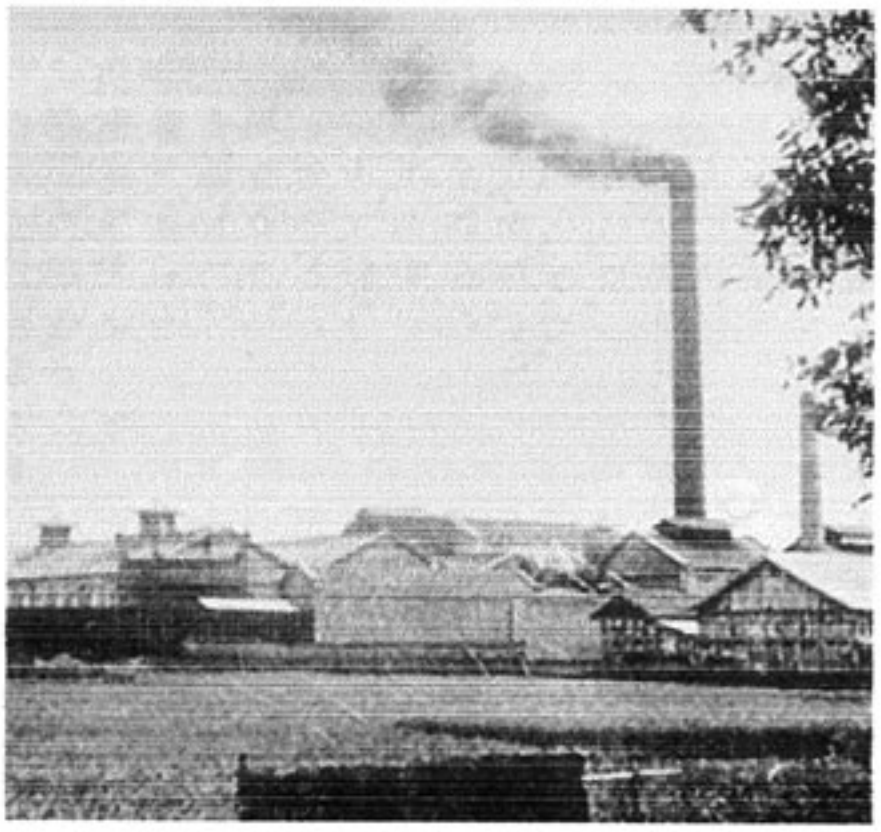
中たちを連れて京都で隠棲。大坂の役で豊臣氏が滅亡した後も徳川幕府の保護を受け、寛永元（1624）年に死去している。

○……○……

ねねはもちろん、長政も実際には、浅野公園にあったという浅野家の居宅にはほとんどいなかったといわれる。しかし、浅野家がその後の日本の歴史に影響を与えたことは確かである。

2007 年 12 月号・67 号 -

明治から平成まで活躍 尾州最大、最古の煙突



一旧日本紡績一宮工場鋼製耐震煙突
かつては高さ 40 メートルの巨大煙突

一宮紡績が日本紡績一宮工場となり、煙突が建造された。写真は明治 44 年ごろの工場風景

一宮市羽衣二丁目にある家電量販店の駐車場の一画に、ずんどうの煙突のような物体が設置されている。かつてこのあたりに立っていた鋼製耐震煙突のモニュメントである。

煙突は、実際には地下 3.5 メートル、地上の高さ約 40 メートルという巨大なものだった。その直径は根本が約 4.5 メートル、先端が約 2 メートルあったという。当時の芝浦製作所（現・東芝）が明治 41（1908）年に建造したものだ。

煙突は、二重張りのレンガの外側を鋼板で補強した耐震構造。地震などによってレンガ造り煙突の倒壊が相次いだため、考案されたものだという。以来、平成 9（1997）年までの 89 年間、現役として活躍してきた。

この煙突は、かつてこのあたりにあった日本紡績（現・ユニチカ）一宮工場の施設。現在その工場跡地は、家電量販店のほか、一宮競輪場や市営球場などになり、かつての面影は残されていない。

有力商人らが設立した一宮紡績が始まり

日本紡績一宮工場の前身・一宮紡績が設立されたのは明治 28 年のことである。このころ、明治政府は各地に相次いで官営工場を建てていた。こうした動きを受け、一宮の有力商人たちが、当時としては巨額の 50 万円という資本金で一宮紡績株式会社を発足させたのである。

一宮紡績は、国内における瓦斯（がす）糸紡績の先駆者としてスタートした。瓦斯糸とは、綿糸をガスの炎の中をくぐらせて表面を焼いたもの。細く光沢のある瓦斯糸は、需要が高かかったものの、当時ほとんどが輸入品だった。これが一宮紡績を発足させた要因となったのである。

しかし一宮紡績はその後、経営難に陥いる。そして明治 40 年、一宮紡績と並ぶ瓦斯糸紡績の雄・日本紡績に合併され、工場は日本紡績一宮工場として再スタートした。煙突が建造されたのはこの翌年のことである。

しかしこの工場も第二次大戦の空襲により煙突を残して全焼。煙突は戦後長らく、染色整理会社が利用を続けていたが、平成 10 年、工場の取り壊しを機に安全上の問題から解体されたのである。

……

明治、大正、昭和、平成の 4 つの時代と、さらには空襲の中さえ生き延びてきた煙突。尾張地区最大で最古の煙突は、「織都一宮」を象徴する存在であった。

2007 年 10 月号・65 号 -

美濃路で唯一、原型とどめる かつての旅の目印、休憩所

―冨田一里塚

昭和 15 年ごろの冨田一里塚

一宮市冨田にある冨田郵便局の近くに、国の指定史跡「冨田一里塚」がある。かつての美濃路の一里塚で、道路をはさんだ対の塚が二つとも残っているのは珍しい。美濃路に 13 あった一里塚の中で、唯一原型をとどめ、かつての面影を今に伝えている。

一里塚はその名の通り、一里（約 4 キロ）ごとに設けられた、いわば道路標識のようなもの。旅人にとっては距離の目安を示す目印であった。織田信長や豊臣秀吉なども築いたといわれるが、本格的に整備を始めたのは徳川家康である。

家康は関ヶ原合戦の翌年、慶長 6（1601）年には早くも街道整備に乗り出しており、慶長 9 年から各街道に一里塚を造り始めた。江戸日本橋を基点に東海道、中山道、北陸道の三道に築かせたのが始まりだという。宿駅制が定められ、街道が整備されるにつれて一里塚は各地で造られるようになった。

一里塚の木はなぜ榎？

一里塚造営の指揮をとったのが大久保長安（ながやす）。甲斐・武田家の家臣だったが、武田家衰退後は徳川家に仕えるようになった。武田家時代は金山開発に従事。徳川家に移ってからは、名古屋城の金シャチ造りなどにかかわったという。

一里塚は街道の両側に土盛りした塚を築き、目印として多くの場合、榎が植えられている。根が深く張って塚が壊れにくくなるからというが、これについてはいくつかの逸話が伝えられている。

木を植えるにあたり、家康の子・秀忠が長安に、当たり前の木ではなく目印になるような木を、という意味で「異

な木を植えよ」と命じた。ところが、これを長安が「エノキ」と聞き間違えてしまったというものだ。

ほかにも、街道に植えられた松でない木ということで言った「余の木」を「エノキ」と聞き間違えた、などという話も残されている。

……

かつて街道に数多くあった一里塚は、旅の目印であると同時に疲れた旅人にとっての休憩所でもあった。今、冨田一里塚の前にたたずむと、その光景が浮かんでくるようである。

2007 年 11 月号・66 号 -

い～ちいまむかし

尾西と羽島結ぶ悲願の大橋 ー濃尾大橋

橋ができるまで交通の主役は渡し船

当初は有料。手前に見えるのは料金徴収所

昭和31（1956）年1月27日、知多と三河を結ぶ「衣浦大橋」の完工式が行われた。衣浦大橋は「夢の架け橋」と呼ばれ、当時日本唯一の海上橋だった。この翌日の1月28日、またも愛知県内で大橋の完工式が行われた。当時の愛知県尾西市（現・一宮市）と岐阜県羽島市を結ぶ「濃尾大橋」である。

犬山より下流の木曽川は、それまで橋が少なく、交通手段は渡し船に頼っていた。しかし、夜間や増水した時などはそれも途絶。そのため両岸の住民にとって、橋の建設は悲願ともいえるものであった。

こうして昭和24年10月、一宮市・起町（後に尾西市）・岐阜県大垣市・竹ケ鼻町（後に羽島市）の四者が濃尾大橋建設期成同盟を結成。建設促進の運動が展開された結果、昭和27年11月に工事が着工されたのである。

当初は有料、自動車 200 円　自転車 10 円

3年以上の歳月をかけて完成した橋は、全長777メートル、幅7.5メートル。総工費は6億5400万円であった。完工式当日、両岸の住民は祝賀のための打ち上げ花火や林立する万国旗の中、橋の完成を喜んだという。

しかし、この橋は開通当初、木曽川では初めての有料橋となった。料金は普通自動車が200百円、乗合バスが300百円、原付自転車が30円、自転車は10円。人と乳母車は無料だったが、この料金設定は当時としては高額であった。この橋が全面的に無料になったのは昭和44年4月1日から。この時、それまであった料金徴収所は撤去された。

この橋の完成によって尾西地方と大垣・西濃地方が直接結ばれ、約11キロあった迂回路が短縮された。また橋の完成で経済や文化の交流が活発化、両地域の発展に大きく貢献したのである。

しかしこの工事では、三名の犠牲者

も出ている。このため完成の翌年、彼らをとむらう供養碑が橋の近くに建立された。ここには、慶長年間（1596～1614）に木曽川の堤防工事で自ら濁流に身を投げて人柱となったという、「慶長の人柱伝説」の与三兵衛をまつる人柱観音も併せてまつられている。

2007年9月号・64号

内部には御真影と教育勅語　天長節などに最敬礼を強制
奉安殿と奉安庫

戦前は各学校に設置

三条神社境内にある奉安殿。かつては隣接する起第二尋常小学校（現・三条小学校）にあった

一宮市三条の三条小学校隣の三条神社境内に、コンクリート製のお堂のような建物が建っている。屋根は銅板ぶき、正面には鉄の扉があり、よく見ると上部には菊の紋章が掲げられている。かつて起第二尋常小学校（現在の三条小学校）の校庭に設置されていた奉安殿（ほうあんでん）である。

奉安殿とは、内部に天皇・皇后の写真（御真影）と教育勅語を納めていた建物のことで、戦前は各地の学校に建設されていた。同様のもので、校舎などの室内に設置したものを奉安庫という。

天皇の誕生日にあたる天長節などの祝賀行事の際には、生徒全員が奉安殿に向かって最敬礼し、教育勅語が朗読された。また、登下校時などで前を通過する際にも、服装を正してから最敬礼しなくてはならなかったという。

御真影などは、当初、講堂や職員室などに設けられた奉安所に入れられていた。しかし、火災の危険などから、校舎内のものは金庫型の奉安庫に改められ、屋外には石やコンクリートによる耐火構造の奉安殿が建てられていった。当時は火災などの際に、御真影を守ろうとして死亡した校長もいたという。

戦前は天皇の権威は絶対的なものだった。そのため奉安殿の外観も、威厳を保つように荘厳で重厚なデザインのものが多かったという。

戦後は多くが解体

戦後になると、ＧＨＱ（連合軍総司令部）は奉安殿の廃止を命令。奉安殿や奉安庫の多くは解体されたり、あるいは地中に埋められたりした。

しかし中には解体を免れたり、地中から掘り起こされたりした奉安殿もある。倉庫として使われたり、納骨堂などに転用されたりして今も各地に残されている。校舎内に今も奉安庫が残る学校もある。

三条神社にある奉安殿は、昭和4（1929）年に建設されたものだという。昭和20年代初めに現在地に移転されたというが、この間の経緯はよくわからない。現在は内部に御真影はなく、

祭りなどの備品の保管庫として使われているという。

2007年8月号・63号

全国規模の騒乱　一宮でも駅前の米問屋などを襲撃
米　騒　動

今から89年前の7月23日、後に日本中を揺るがすことになる事件が北陸の漁村で起こっている。米の価格暴騰に怒った主婦たちが抗議行動を起こしたもので、後に「米騒動」と呼ばれる騒乱の発端となった事件である。この騒動は全国に飛び火し、一宮にまで波及した。今回は、この米騒動について触れてみたい。

漁村の主婦の抗議行動が発端

俗に“女房一揆”とも呼ばれる米騒動は、1918（大正7）年、富山県魚津町の漁村の主婦40数名が米価高騰に対して抗議を起こしたのが発端である。米価の高騰は、前年に起きたロシア革命で日本政府がシベリアに出兵することを見込んで、米商人たちが米を買い占めたために起きたものだ。

騒動は、米の輸送船が港で積み出し作業を行っていたところへ主婦が集結したことから始まった。ここで主婦たちは米の積み出しをやめるよう要求。彼女たちの猛烈な抗議行動の結果、米の積み出しは中止された。

この一漁村で起きた事件は、その後、周辺の町村に波及。さらに新聞などで大きく報道されたため、またたく間に全国へ飛び火した。騒動が起きなかったのは、青森、秋田、岩手の東北三県と沖縄県だけだったというから、文字通りの全国闘争であった。

名古屋では大規模な市街戦に

名古屋では、8月12日の夜、鶴舞公園に5万人を越える群衆が集結し、自然発生的に米価高騰に対する抗議集会が開かれた。集会終了後、群衆はグループに分かれて市内に繰り出し、米穀商や派出所などを襲撃した。中でも米穀取引所や米穀商が数多くあった米屋町（現在の中村区名駅三丁目～四丁目あたり）に繰り出した群衆は暴徒化し、警官隊と衝突。群衆は丸太や竹ざおで武装し、警官隊に石や瓦を投げて渡り合った。

そのため警察だけでは防ぎきれないと判断した県知事が、軍隊に出動を要請。名古屋の第三師団が出動してようやく市街戦さながらの騒乱は鎮圧された。騒乱はその後も散発的に続き、多数の負傷者や逮捕者を出している。

一宮でも駅前の米穀商を襲撃

一宮の米騒動があった浦町あたり。米穀商が群衆によって襲撃された（現・栄一丁目・三丁目）

名古屋の米騒動は、すぐに周辺都市に波及した。豊橋では群衆が派出所や米穀取引所を襲撃したため、豊橋の第十五師団が出動している。さらに瀬戸、挙母（現・豊田）でも騒動が発生。それ以降も、一色、岡崎、刈谷、蒲郡、岩倉、弥富など愛知県全域へ拡大していった。

一宮では、8 月 12 日の夕方から臨時町会（当時は一宮町）を開催。当面の対策として外国米の安値販売などを協議した。しかしこの町会を傍聴するため集まった群衆は、町会終了後に暴徒化した。

群衆はまず尾張一宮駅前の浦町（現在の栄一・三丁目あたり）の米穀商を襲撃。さらに周辺の米穀商を相次いで襲った。その後、豊島邸を目指して進撃したが、午前 3 時ごろになって解散している。一宮の騒動はこの一日だけで終わり、これを受けて町では、施米などをして人心の安定に務めたという。

※　※　※　※　※　※　※　※

米騒動は自然発生的なもので、組織されたものではなかった。しかしその参加人数や出動した軍隊の規模など、近年まれな大規模騒乱事件であった。このため、その責任を問われて時の寺内正毅内閣は倒れ、替わってわが国初の政党内閣・原敬内閣が誕生している。またこの騒動の経験が、その後の労働運動や全国水平社などの社会運動の拡大につながっていったのである。

2007 年 7 月号・62 号

解体される一宮の顔
尾張一宮駅と旧国鉄

以前、本欄でも取り上げたことのあるＪＲ「尾張一宮」駅の駅ビルが解体される。老朽化していたとはいえ、長年「一宮の顔」として親しまれてきただけに、感慨を持つ市民も多いことだろう。そこで今回はこの駅ビルの歴史を再度振り返ると共に、ＪＲ（国鉄）の歴史についても見てみよう。

明治 19 年「一宮」駅開設

「♪～汽笛一声新橋を　はや我汽車は離れたり　愛宕の山に入りのこる月を旅路の友として～♪」

これは明治 33（1900）年に発表された『鉄道唱歌』の一節である。『鉄道唱歌』は、全部で 342 番まであり、それぞれに鉄道沿いの各地の名所・旧跡や特産物などが歌い込まれている。

ちなみに 34 番では「名たかき金の鯱は　名古屋の城の光なり　地震のはなしはまだ消えぬ　岐阜の鵜飼も見てゆかん」（※ここでいう地震は、明治 24 年におきた濃尾大地震のこと）と名古屋城が、また 35 番では「父やしないし養老の　滝は今なお大垣を　三里へだてて流れたり　孝子名誉ともろともに」と養老の滝が歌われている。

わが国初の鉄道が新橋―横浜（現在の桜木町）間で開通したのは明治 5 年のこと。東海道線の「一宮」駅（後に、他の一宮駅との混同を避けるため「尾張一宮」駅と改称）が開設されたのは明治 19 年 6 月のことである。

鉄道事業は当初、政府の工部省が管轄。その後、鉄道庁、鉄道省などが担当し、第二次世界大戦後になって、現在のＪＲグループの前身にあたる日本国有鉄道（国鉄）に引き継がれている。

国鉄設置はＧＨＱ（連合軍総司令部）の要請に基づくもの。鉄道を政府事業

から分離し、公共企業体が運営するとした「日本国有鉄道法」が成立。昭和24（1949）年6月、国鉄が発足したのである。

第1期工事が終わったころの尾張一宮駅（昭和26年）

空襲で全焼。民衆駅として再建

戦前あった木造の尾張一宮駅舎は、昭和20年7月の一宮空襲によって全焼。そのため戦後はバラックの仮駅舎でのスタートとなった。しかし、駅舎の再建を望む市民の声は強く、「民衆駅」として近代的な駅舎を再建することとなった。

民衆駅とは、国鉄と自治体などの外部機関が駅舎の建設費を分担。国鉄の財政難から考え出された、今日の駅ビルの先駆けのようなものである。昭和26年10月には一期工事が終了。すべての工事が終了したのは翌年2月のことであった。当時この周辺には、この駅舎と商工会議所ビルぐらいしか高い建物がなく、地域のランドマークとしての役割も果たしていたという。

一方、国鉄は国内の旅客・貨物輸送の主力として躍進していった。しかし昭和40年代後半に入ると、政治家のからむ赤字ローカル線や東北新幹線の建設費などによって巨額の赤字を抱えるようになる。

そして昭和62年4月、「経営再建」を掲げて国鉄を解体する「国鉄分割民営化」が実施に移された。国鉄は6つの旅客鉄道会社と一つの貨物鉄道会社などに分割されたのである。

またこの分割民営化には、当時、日本の労働運動の中心的存在だった国鉄労働組合（国労）などが猛反発。民営化後の現在に至る、さまざまなあつれきを残す結果となった。「国鉄の解体」は「国労の解体」も同時に押し進めたのである。

2007年6月号・61号

木曽川橋梁上で実現。ＳＬ世界最高速記録「Ｃ6217」

今年で開園70周年を迎える名古屋市千種区の「東山動植物園」。休日には親子連れなどでにぎわう、この動植物園の一画に一両のＳＬ（蒸気機関車）が展示されている。

外見的にはありふれたＳＬだが、このＳＬ「Ｃ６２１７」こそ、今から53年前、狭軌（線路の幅が狭い）鉄道用としての世界最高速を記録した歴史的なＳＬなのである。

木曽川橋梁強度検査での偶然の産物

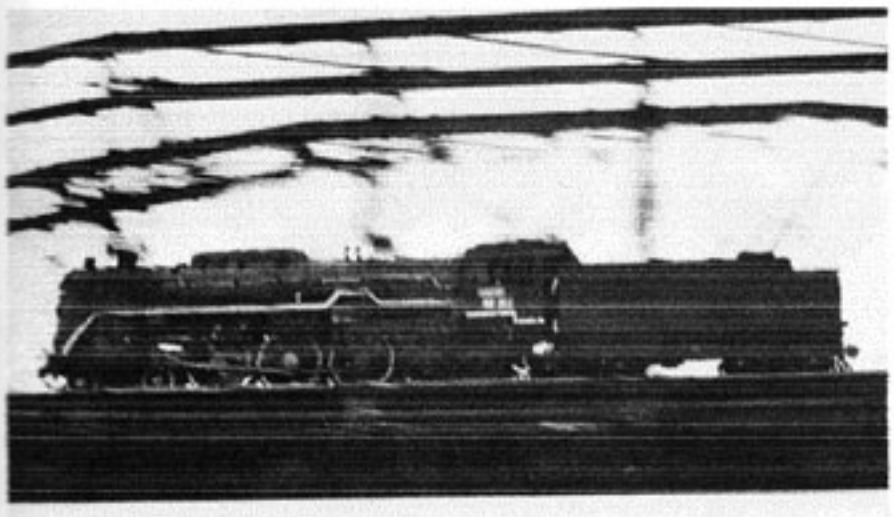
Ｃ６２１７が世界最高速を記録したのは昭和29（1954）年12月15日。場所は愛知県と岐阜県を結ぶ東海道本線の木曽川橋梁上であった。

木曽川橋梁は東海道本線開通以来、

何十年と使われきた古い構造の大鉄橋。そのため今後の「電化」や「スピードアップ」「輸送量の増加」など、予想される事態に鉄橋が耐えられるかどうか、その強度を調べるための走行テストが行われた。

世界最高速記録は、この木曽川橋梁の耐久力を試す際の、いわば副産物として偶然生まれたのである。機関車の性能テストなどのために、速度を上げて記録されたものではなかった。

記録された速度は、時速１２９キロ。当時としては驚異的なスピードであった。Ｃ６２１７の総重量は約 130 トン。その巨体が橋の上を疾走した際に出されたもので、これが狭軌用ＳＬとしての世界最高速記録となった。大半のＳＬが姿を消した今となっては、この記録が塗り替えられることはもうないと思われる。



木曽川橋梁上での時速 120 キロの走行試験。この時、時速 129 キロという世界最高記録を出した

東海道本線の特急列車用として活躍

Ｃ６２１７は、昭和 25 年 8 月に名古屋機関区に配属されている。以来、昭和 30 年 7 月に梅小路機関区に転出するまで、東海道本線の「つばめ」や「はと」「さくら」などの特急列車用として使用されており、この地方ではおなじみのＳＬだった。

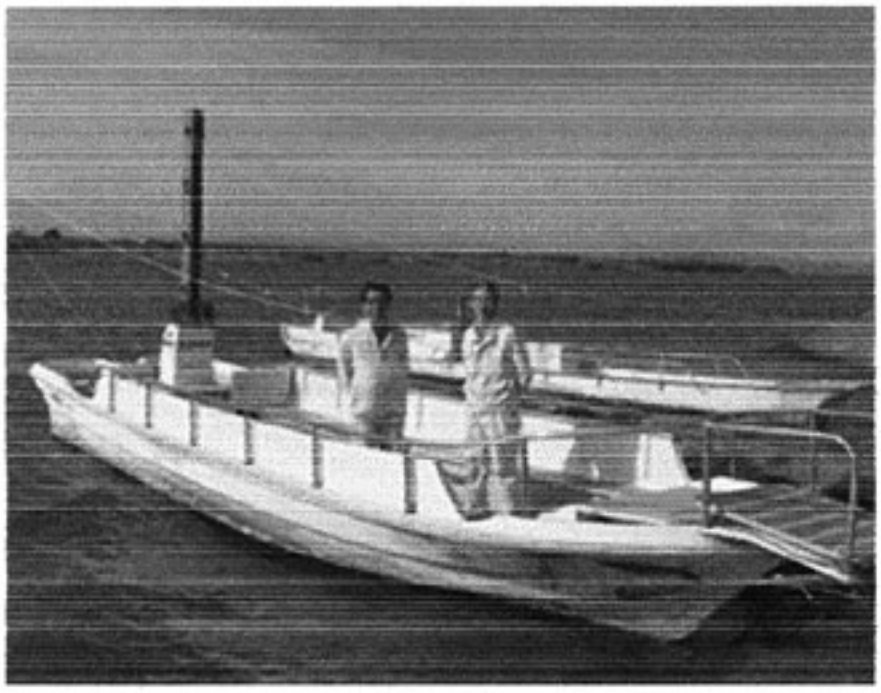
Ｃ６２１７を含むＣ６２型は、昭和 23 年から 24 年にかけて約 50 両が製造されている。東海道本線のほか、山陽本線、常磐線、東北本線などの長距離特急用として活躍したという。

なお、Ｃ６２１７はその後、昭和 45 年９月に糸崎機関区を最後に引退。使用停止になるまでの運転キロ数は約 257 万キロ。これはＣ６２型としての最高記録となっている。

2007 年 5 月号・60 号

今も運航、木曽川の渡し舟。かつては重要な交通手段

「中野の渡し」（西中野渡船場）県道の一部として無料で運航



現在の西中野渡船場。船に乗っているのは、運航を担当する秋江さん（左）と中野さん

一宮市西中野（旧尾西市西中野）と対岸の岐阜県羽島市を結ぶ、木曽川の渡し舟が今も健在である。かつての呼び名から「中野の渡し」として知られ

ているが、正式には「愛知県営西中野渡船場」といって、県道の一部である。

旧尾西市には、かつて木曽川の渡し舟が「起」「駒塚」「加賀野井」「西中野」と四カ所あったが、現在では「西中野」だけが存続している。かつては20数カ所に渡し舟があったというが、橋ができるたびに廃止され、現在では県営の渡し舟は木曽川では「西中野」と「日原」「葛木」の三カ所だけが残されている。

「中野の渡し」は、岐阜の県道 118 号と愛知の県道 135 号の一部とされ、そのため運賃は無料。運営費は愛知県と岐阜県が負担し、昭和 13 年から運営されている。

「西中野渡船場」

年中無休(増水した時や強風の日などを除く)。「午前8時半～11時半」「午後0時半～2時半」「午後3時半～同4時半」の時間帯に運航している。

現在はほとんどが観光目的

「県営西中野渡船場」の標注が立つ番小屋には、県の委託を受けて渡し船の運航を担当する船頭さんがいる。その一人、秋江利幸さんによると、「かつては手こぎの帆掛け船だった。2～3キロごとに渡し場があって、昭和 40 年ごろがピークだった」という。

船に乗る時間は 7 分ほど。対岸（羽島市側）の船着場には番小屋はなく、手動で旗を上げるポールがある。対岸から乗る人は、旗を上げて西中野の番小屋に合図を送り迎えにきてもらう。

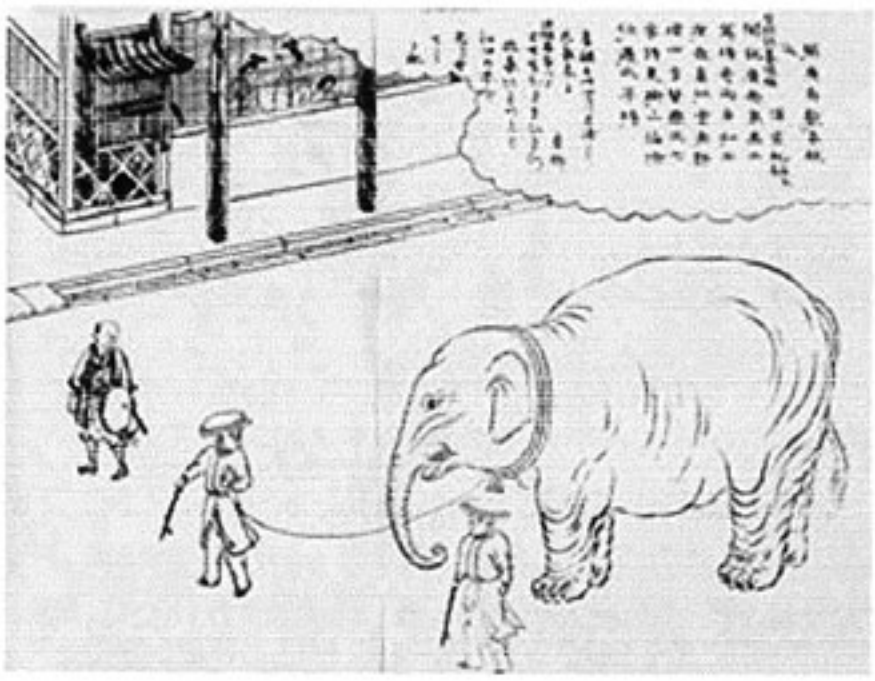
年間の利用者は 5,000 ～ 6,000 人ほどだが、ほとんどが小学生の遠足などの観光目的。そのため 5 月ごろがもっとも利用者が多く、逆に冬場はほとんど利用されないという。

かつては近くに美濃路の宿場町「起」宿があったことから、この地域には江戸時時代からいくつもの渡船場があった。「中野の渡し」でも、5 ～ 60 隻の船が停泊していた時期もあったという。しかし近くに橋が架けられる計画もあるとかで、そうなれば「中野の渡し」もその姿を消してしまうことになる。

2007 年 4 月号・59 号

起（おこし）にゾウがやって来た「象の舟渡し」

木曽川を渡ったゾウ



起を経て江戸に向け名古屋の茶屋町を通過するゾウ／『小治田之真清水』より

一宮市起にある尾西歴史民俗資料館

に「象の舟渡し」と題された模型が展示されている。江戸時代に美濃路にあった「起宿」にゾウが来た際、木曽川を舟で渡ったときの模様を再現したものである。

日本に初めてゾウが渡来したのは、室町時代の応永 15（1408）年のこと。ゾウは現在のインドネシア・スマトラ島のパレンバンから送られてきたもので、日本には福井県の小浜に到着している。このゾウは、時の将軍・足利義持（よしもち）への献上品で、ほかにクジャクやオウムなども献上されたという。

起にゾウが来たのは、それから 300 年以上後のこと。こんどは徳川幕府八代将軍・吉宗に献上するためであった。江戸時代中期の享保 14（1729）年、現在のベトナムから長崎を経て江戸へ送られる途中、起で宿泊したのである。

このゾウは前年の 6 月、清の商人がベトナムから連れてきたもので、いわゆるアジア（インド）ゾウ。長崎に到着した時にはオス、メスの 2 頭いたが、メスの方は長崎到着後に死んでしまったため、江戸に送られたのはオスのゾウだけであった。

ゾウは、翌年 3 月に長崎を出発。4 月下旬には伏見から京都に入った。ここでゾウは「従四位」の位を授けられた後、天皇に引き合わされている。この時、ゾウと対面した中御門天皇は「時しあれば他の国なる獣をけふ九重に見るがうれしき」と、その感激を歌に詠んでいる。

尾張藩主もゾウを見物

ゾウの一行には十数名の警護が付いていたが、それ以上に大変だったのが道中の各藩の対応であった。ゾウが通るために街道や橋を補強したり、エサの準備などにほん走したという。見物人に対しても、大声や鐘、太鼓の音でゾウが興奮しないよう「静かに見物せよ」とのおふれが出されている。特に長良川を渡る際、興奮したゾウが暴れたため、以後、このおふれは徹底されたという。

このゾウが起に来たのは 5 月 3 日のこと。ゾウが木曽川を渡る際には、朝鮮通信使（朝鮮王国の外交使節団）のように船を並べて「船橋」を架けることも検討されたが準備が間に合わず、結局、尾西歴史民俗資料館の展示のように二つの舟をつなげて川を渡ったという。

その後、ゾウの一行は 4 日に清洲に泊まり、翌 5 日に名古屋を通過している。その際には尾張藩主も城下の屋敷から見物したという。その後、大きなトラブルもなくゾウは 5 月 25 日、無事江戸に到着した。

吉宗が江戸城でゾウを見物したのは、2 日後の 5 月 27 日。ゾウはその後、死ぬまでの 13 年間、浜御殿で飼育された。吉宗はゾウがたいへん気に入ったようで、何度も江戸城に呼び寄せては眺めていたという。

一方、庶民も初めて見るゾウに驚嘆。大勢の人がゾウを見ようと押しかけ、その道中は人だかりが絶えなかった。またこれをきっかけに、ゾウの絵を描いたすごろくが発売されるなど、一種の「ゾウブーム」が起こったという。

2007年3月号・58号

婦人の地位向上に捧げた人生
市川房枝の生涯
地元出身一宮市の名誉市民

一宮市明地の朝日東小学校の隣に「朝日東児童館」がある。図書館も併設された施設だが、ここの二階にガラスケースに収められた資料が展示されている。明地の出身で参議院議員だった市川房枝に関する資料である。

児童館の土地は、房枝の姉の遺志で寄贈されたもの。建設時には房枝が記念講演を行っている。昭和56（1981）年には、当時の尾西市議会で全会一致によって名誉市民に選ばれている（現在は一宮市の名誉市民）。

何故女は、我慢しなければならないのか

房江は明治26（1893）年、中島郡明地村（現一宮市明地）に農家の三女として生まれている。父親は子どもたちにはやさしく、当時の農家としては分不相応とも思える教育を受けさせた。しかし一方で母親に対しては、たびたびなぐりつけるなど暴君として振る舞ったという。

後に母親は「女に生まれたのが因果だから」と話していたといい、房枝も自伝で「私の人生は母の嘆きが出発点だった。何故女に生まれたのが因果なのか、何故女は我慢しなければならないのか」と書いている。子どもの時のこの体験が、房枝を婦人の権利拡大運動に情熱を傾けさせる原点となった。

名古屋新聞（現中日新聞）初の女性記者に

女子師範学校卒業後、房枝は母校、朝日尋常高等小学校（現在の朝日東小学校）の教師となる。しかし病気で退職し、名古屋新聞（現在の中日新聞の前身）に就職。同紙初の女性記者となった。

その後、新聞社を辞職した房枝は上京し、平塚雷鳥らと日本初の婦人団体「新婦人協会」を設立。婦人の政治活動を禁じていた治安警察法の改正を求める運動を展開した。さらに婦人の参政権を求めて「婦選権獲得同盟」を結成するなど、婦人の権利拡大の運動を推進していった。

お金をかけない「理想選挙」を展開

戦争が終結すると「新日本婦人同盟」を結成、会長に就任する。終戦から4カ月後には房枝の悲願だった婦人参政権が実現している。しかし、この後、戦時中に大日本報国言論会の理事を務めたことが問われ、公職追放となってしまう。

追放解除後は日本婦人有権者同盟の会長に就任。昭和28（1953）年には参議院選挙に立候補し初当選する。組織に頼らず手弁当でお金をかけない選挙スタイルは「理想選挙」とまで言われた。昭和55（1980）年の参議院選挙では87歳の高齢でトップ当選を果たしている。しかしこの翌年、房枝は心筋梗塞（こうそく）で死去。葬儀の

際、棺には愛用の眼鏡とともに「女子差別撤廃条約」のコピーが納められていたという。

房枝は、その飾らない人柄から「だいこんの花」と呼ばれていた。生涯独身を通し、婦人の地位向上にその一生を捧げたのである。

2007年2月号・57号

土の温もり、素朴な味わい 伝統受け継ぎ、今も制作 起土人形

始まりは天保年間から

起土人形（いずれも「一宮市尾西歴史民俗資料館」で）

一宮市富田に江戸時代から続く土人形作りの伝統を引き継ぐ人がいる。中島一子さん、80歳。一子さんは、この地方ではただ一人の土人形作りの担い手である。

この土人形は江戸時代の天保年間（1830～1844）、富田村の中島左右衛門が名古屋の土人形師から技術を習得し、作り始めたのが始まりとされる。かつてこの地方にあった美濃路の宿場町・起（おこし）からとって「起土人形」と呼ばれ、同じように作られる土鈴も「起土鈴」と呼ばれる。

土人形作りは、左右衛門を初代として代々、中島家が受け継いできた。そして5代目を一子さんの夫・一夫さんが受け継ぎ、一夫さんが2004年に亡くなった後、6代目として一子さんが引き継いだのである。一夫さん、一子さん共に市の無形文化財に指定されている。

かつては全国から注文

土人形の制作は、農作業の合間を縫って行われる。田植えの終わったころの6月から7月に、土をこねて生地を作る。これを型に入れて人形を作り、夏場に乾燥。そして稲刈り前の10月に窯焼きをする。さらに米の出荷の終わった冬場に絵付けをするというサイクルで、ほぼ一年がかりの作業だ。

土人形作りは、一人前になるのに10年はかかるという。特に絵付けは難しく、「最後の墨入れ（人形の目を書き込むこと）は、どうしても夫のようにうまくはできない」（一子さん）というほどだ。

一夫さんの代には、歌舞伎人形やひな人形、福助や十二支の土鈴など、さまざまなバリエーションの土人形が制作された。さらに岐阜市美江寺の蚕鈴（かいこすず）や一宮真清田神社の神馬など、神社仏閣の縁起物も作られていた。

当時は全国から注文がきて、数年先まで予約注文でいっぱいだったこともあったという。現在では夫と共に土人形を作り続けてきた一子さんが、関係者への贈り物などに「趣味として」制作を続けている。また、一子さんの子息も土人形作りに興味を示していると

いう。

土の温もりが伝わってくるような素朴な味わいの起土人形。江戸時代から多くの人に愛されてきたこの人形が、この先も作り続けられることを祈りたい。

2007年1月号・56号

忠臣蔵
愛知出身の「名君」と「忠臣」
吉良上野介と片岡源五右衛門

地元民は名君として慕う

「元禄事件最大の被害者」…… 吉良上野介

最近はそれほどでもないが、以前はこの時期になるとテレビや映画、芝居で必ず取り上げられたのが「忠臣蔵」である。いわば師走の風物詩で、かつて一宮に数十館あったという映画館や劇場でもこの時期には「忠臣蔵」がかかっていたであろうと思われる。今回は地元の話題から離れ、この忠臣蔵に触れてみたい。

華蔵寺にある吉良上野介の墓

とは言っても、忠臣蔵と愛知県とは実は縁がある。よく知られているように、赤穂浪士に討ち入られる側の吉良上野介（きら・こうずけのすけ）は、三河の吉良町を領地とする旗本である。

上野介は映画やテレビ、舞台などでは、その立ち振る舞いも含め悪役そのものにえがかれている。しかし地元での評価は違う。善政を行った名君とされ、領民から慕われていたという。小説『人生劇場』で知られる地元出身の作家・尾崎士郎も「吉良の殿様よいお方、赤いお馬の見回りも、浪士に討たれてそれからは、仕様がないではないかいな」などとうたっている。

上野介は新田開拓や塩田開発をする一方、私財を投じて洪水から領民を守るために堤防を作ったりしたという。この「黄金堤」は今も残っており、そこには馬にまたがった上野介の像も建てられている。これは、上野介が赤馬に乗って領内を見回ったという言い伝えに基づくものだ。

吉良家の菩提寺である華蔵（けぞう）寺には上野介の墓があり、討ち入りの日の12月14日には毎年、地元民の手によって上野介の供養祭も行われている。また今年10月には「元禄事件最大の被害者を偲ぶ」と題した、上野介に関するシンポジウムも開かれるなど、上野介に同情する地元民の思いは強いようだ。

吉良家の個人寺だった華蔵寺の関係者は「吉良公についてはいろいろな説があるようですが、地元民が彼を崇敬していたのは事実。討ち入り後に吉良家が絶えてしまってからも、檀家ではない領民たちによってこの寺が今日まで立派に守られてきたのがその証拠です」と話している。

主君の最期を見届けた名古屋生まれの赤穂義士…… 片岡源五右衛門

片岡源五右衛門の墓／名古屋市千種区平和公園・乾徳寺墓地内

一方、討ち入った赤穂浪士の側にも地元・名古屋出身の人物がいた。片岡源五右衛門（かたおか・げんごえもん）である。源五右衛門は、尾張藩士・熊井重次の二男。八歳のときに叔父にあたる赤穂藩士・片岡六左衛門の養子となり、その後、藩主・浅野内匠頭（あさの・たくみのかみ）に仕えることになった。

源五右衛門は内匠頭に信頼されていたようで、このことは切腹の際に内匠頭が源五右衛門に遺言を託していたことからもうかがえる。また源五右衛門は主君の最期を見届けた人物でもある。切腹の場で、内匠頭と源五右衛門が目と目で交わす無言の別れのシーンは、忠臣蔵前半の見所の一つだ。

その後、源五右衛門は主君の墓前であだ討ちを誓い、リーダーの大石内蔵助（おおいし・くらのすけ）と行動を共にする。そして討ち入りを決意すると、妻子と離別。江戸へ向かう途中には名古屋に立ち寄って、実の両親に会っている。

この時の模様が江戸末期に編さんされた『尾張名所図会』にえがかれている。それによれば「薬売りに変装した源五右衛門は、父親から『なぜあだ討ちをしないのか』『腰抜け』などとののしられるが本心は明かさず、その後、討ち入りを知った父親は声を上げて喜んだ」という。

名古屋市千種区にある平和公園の乾徳寺の墓地に「赤穂義士墓」としるされた源五右衛門の墓碑が立っている。乾徳寺は、源五右衛門の実家・熊井家の菩提寺で、墓にはその遺髪が埋葬されているのだという。

2006年12月号・55号

人と物の交流通し、県内一のにぎわい　三八市 始まりは享保12年

『尾張名所図会』に描かれた三八市の模様

かつての一宮の名物に、真清田神社前で開かれていた「三八市」がある。三八市は、享保12（1727）年、市が許可されたことに始まる。市の開設は地元の人々の度重なる誓願の結果、北方代官所が許可したもの。許されたのが三と八の日であったことから、こう

呼ばれた。

その背景には、農業技術の進歩に伴い農作物のほかに綿や燈油の原料となる菜種、染料となる藍などの商品作物の生産が増大したこと、農家の副業だった綿織物などの生産が盛んになったことが挙げられる。これらの商品の売買や、みそなどの日用品の交換の場として、市開設の要望が農民の間に高まっていたのである。

三八市ではあらゆる商品が売買されていた。綿、糸、ろくろ、糸車などの綿織物に必要なものから、みそ、たまり、魚、酒などの食品、さらには農家にとって必要な竹かご、熊手、種や苗なども取り引きされていた。さらに、この人出に引かれて菓子屋やおでん屋、甘酒屋などが軒を連ねるようになり、時には見せ物小屋なども登場し、人々を楽しませたという。

綿織物が市の主役に

綿織物の生産が活発化してくると、関係する製品が大量に三八市に集まるようになる。こうして市が開かれるときには岐阜や名古屋からも行商人が来て店を張るようになった。中には古手商と呼ばれる中古衣料を扱う店もあって、農民に人気があったという。

市への出店数は、天保 13（1842）年当時で 500 近くあり、そのにぎわいのほどをうかがうことができる。その模様は、江戸時代末期に刊行された史跡・観光ガイドブックの『尾張名所図会』にも、「一宮　月並市」として絵入りで紹介されているほどだ。

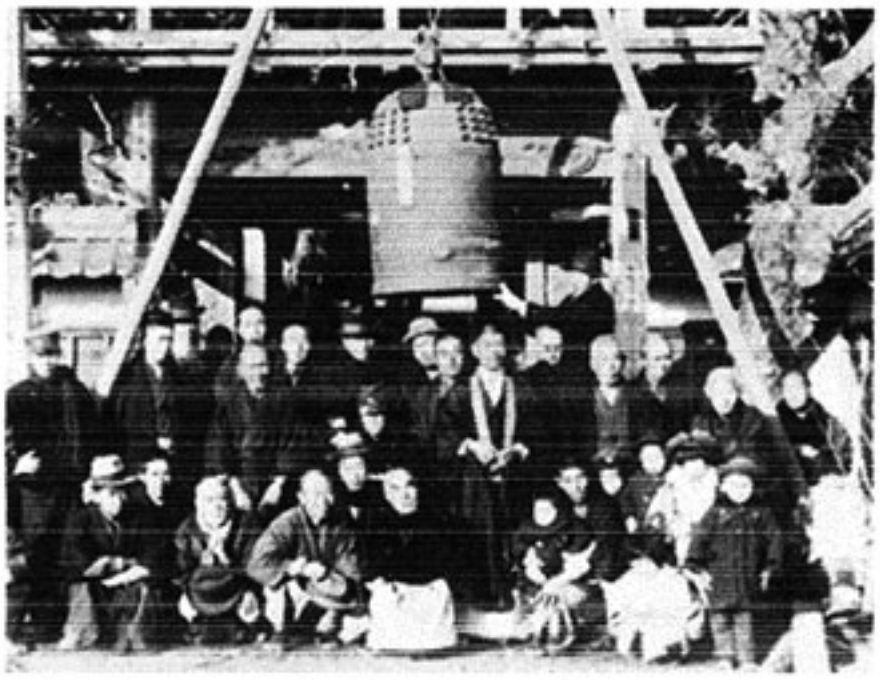
闇市が三八市の最後？

このにぎわいは明治に入ってからも引き継がれ、明治 5（1872）年の出店数は 738 にものぼっている。こうして三八市は愛知県一の市場となり、この地方の経済活動の中心となっていった。そして昭和 5（1930）年にはピークを迎えている。

しかし戦争の足音が高まるにつれ、市は次第に衰退していく。そして戦後の一時期にぎわいを見せた「闇市」が、形を変えた三八市の最後だといわれる。こうして、終戦直後に一瞬のにぎわいを見せ、三八市は消滅していったのである。

2006 年 10 月号・53 号

金属供出と代用品
寺から姿を消した梵鐘
登場した陶製のやかん



供出されるお寺の梵鐘（一宮市の妙楽寺で）

以前、本欄でかつて九品地公園（一宮市文京一）にあった「九品地大仏」について触れた。戦前の金属供出で撤去され、戦後になって発見された頭部をもとに犬山の成田山で復元されたという話だ。このように戦前の金属供出は、かなり広範囲にわたって行われて

いる。

金属供出は当初、家庭や役場の倉庫などで不用となった金属製品を集める程度の、ゆるやかなものだった。しかし物資不足が深刻化すると、国家総動員法にもとづき昭和 16（1941）年に「金属回収令」が打ち出される。武器・弾薬のための鉄などの金属資源不足を補うためのもので、役場や企業、学校から家庭までさまざまな場所で金属回収が行われた。

回収の対象となったのは、子どものおもちゃから学校の二宮金治郎像まで幅広い。東京などでは金属回収工作隊が結成され、学校のストーブから家庭で使われていたなべに至るまで回収していったという。お寺の梵鐘（ぼんしょう）も回収の対象となり、各地の寺院から梵鐘が姿を消してしまった。

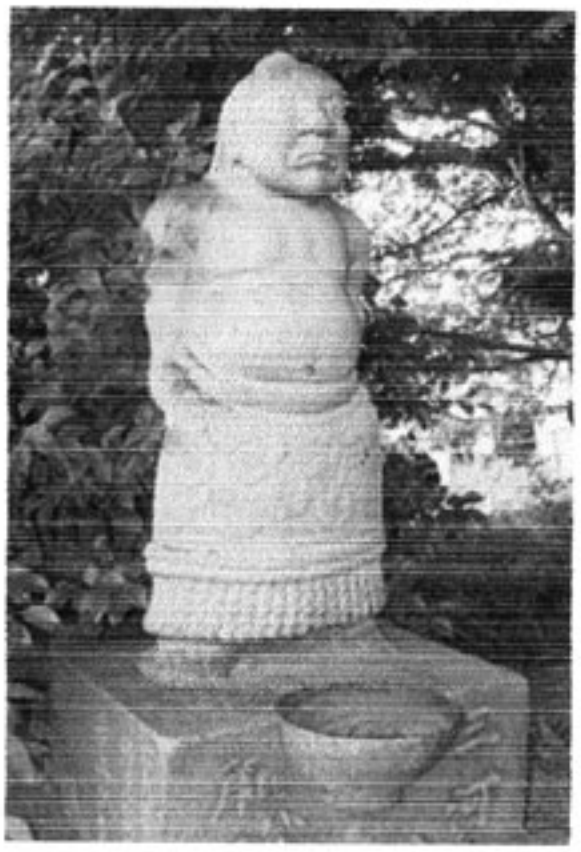
その後、金属供出はさらに徹底され、鉄びんや火ばし・仏具や窓枠、時計の鎖からネクタイピン、さらには身の回り品に使われていた金、銀、白金、ダイヤモンドなどの貴金属までもが回収された。文字通りの根こそぎ回収であった。ちなみに、昭和 19 年の一宮市での金属回収量は鉄が 95 トン、銅は 17 トンにのぼったという。

かわって登場したのが代用品である。なべややかんは陶製にとってかわられ、バケツや水筒は江戸時代のように木製になった。金属以外でも純毛や純綿は軍事用が優先され、皮革類も牛革は使えず、かわってブタやサメ、クジラの皮などが代用品として登場したという。

「欲しがりません　勝つまでは」がスローガンとして掲げられ、庶民は「すべては戦争に勝つまでの一時的なこと」とがまんしていた。しかし、紙製のチョッキ（ベスト）まで登場するにいたって、事態が絶望的であることを認識したのである。

2006 年 8 月号・51 号

大相撲と相撲膏【前編】
森林平医師と浅井万金膏
相撲に縁の深い浅井町



森医院の隣の長誓寺の参道にある、力士の姿をかたどった石像

大相撲名古屋場所の真っ最中。連日、力士による熱い戦いが土俵上で繰り広げられている。ところで一宮の浅井町といえば、相撲とたいへん縁の深かかったことで知られている。体をいためた力士が、治療のためこの地の森医院に押し寄せていたからである。

話は江戸時代にまでさかのぼる。尾張藩のお抱え力士だった境川浪右衛門（さかいがわ・なみうえもん）が修行時代、医師の森林平（もり・りんぺい）氏の治療を受けて全快。その後、大関にまで昇進した。この話が全国に伝わり、以後、体をこわした力士が、全国から森医師の元へ集まるようになったという。

藩主も喜んだ万金膏

森氏が治療の際に使用したのが、後

に「相撲膏」と呼ばれるようになる「浅井万金膏」である。万金膏は森氏が中国の医学書からヒントを得て考案したという。その後、四代目の森林平氏の時、落馬してけがをした尾張藩主がこの万金膏で全快したことから、喜んだ藩主が全国での販売を許可。藩のお抱え力士らに使用させるとともに、宣伝にも務めたという。

その結果、万金膏は力士たちに愛用されるようになり、けがをした力士たちが相次いで治療のため森医院を訪れるようになった。明治期になると万金膏の販売網は全国に広がり、明治末期から第二次世界大戦ごろまでには最盛期を迎えた。国内はもちろん、アジアや南米などにも輸出されたという。

しかし戦後は、医学の発達や各種の湿布薬の普及などから生産量も次第に減少。とうとう平成9年には生産が打ち切られてしまった。

力士の碑の建立者は？

森医院では代々、力士からは治療費も取らず、帰りの旅費まで与えて優遇したといわれる。そのため、森家の屋敷には、力士だけが寝起きする相撲部屋のようなものもあったという。

また、近くの浅井山公園では、薬師如来の縁日に奉納相撲も行われていた。ここで治療していた力士のうちで全快に近い力士、それに地元や三河、伊勢などからの素人力士らが参加し、「浅井場所」とも呼ばれていた。

現在の森医院の隣にある長誓寺の参道には、力士の姿をかたどった石像と「東京力士霊魂之碑」としるされた石碑が立っている。治療のかいなく亡くなった力士を追悼するため、明治期の横綱「常陸山」に書を依頼して建てたものだ。

この石碑を建立したのが、濱碇（はまいかり）という元力士である。ではなぜ、濱碇はこのような石碑を建てたのだろうか？　（後編に続く）

2006年9月号・52号

大相撲と相撲膏【後編】浅井万金膏と元大相撲力士の濱碇（はまいかり）

力士から薬売りに転職

旧東海道沿いに濱碇が建てた力士像や顕彰碑、地蔵堂（安城市里町中野池）

前号で一宮・浅井町の森医院がかつて販売していた「浅井万金膏」のことを紹介した。江戸時代より体をいためた力士によって愛用され、別名「相撲膏」とも呼ばれていたという。

その森医院の隣にある長誓寺に、力士の姿をかたどった石像が立っている。治療のかいなく亡くなった力士を追悼するため建てられたものだ。この石碑を建立したのが、濱碇（はまいか

り）という元力士である。

安城出身の濱碇は、明治 12（1879）年に大相撲の初土俵を踏み、その後三段目まで昇進。しかし 14 年の巡業中に打撲傷を負い、この時、一宮の森医院で治療を受けたのである。

ケガは治ったものの力士としての再起は難しく、濱碇は廃業を決意した。この際、森医院の森林平医師の勧めにより、薬の行商を始めることにしたという。その後、森医師は三河地方での浅井万金膏の独占的販売権を無償で濱碇に譲っている。

当時、浅井万金膏は全国に知られた有名な薬で、その販売権は濱碇に大きな利益をもたらしたという。森医師が浅井万金膏の販売権を譲った背景として、明治 24 年に起きた濃尾大地震がある。

浅井町は震源に近く、この時、たまたま森医院にいた濱碇が、足の悪かった森医師を抱きかかえて助けたという。さらに震災によってけがをした人たちの治療のためにも奔走。こうした事情から森医師は浅井万金膏の三河での販売権を濱碇に譲ったのだという。

各地で地蔵や碑を建立

力士廃業後も濱碇と大相撲との縁は続いていた。薬を行商する一方で、濱碇は大相撲の代理人も務めていたのである。地方巡業や相撲の興行などで世話役として活躍したという。

その後、濱碇は浅井万金膏の販売や相撲興行などで蓄えた財産を使って各地に地蔵や碑などを建て始めるようになる。行商先の村などに頼まれて建てたもののほか、恩を受けた人の顕彰碑なども建てている。

安城市里町中野池の旧東海道沿いに、前述した長誓寺にある力士像と同じ化粧回しをつけた力士の石像が立っている。濱碇が建立した自身の像である。力士像の隣には森林平医師の石碑も建っている。濱碇が、森医師から受けた恩に、いかに感謝していたかを象徴するものだ。

濱碇は昭和 6（1931）年に 76 歳で亡くなっているが、濱碇が建てたという地蔵や碑が今も各地に残されている。また、濱碇のあとを継ぎ、「ハマイカリ」の通称で知られる薬局が、現在も安城市内で営業を続けている。

2006 年 6 月号・49 号

文化遺産守る登録文化財
木曽川資料館など登録へ
一宮から三件が登録文化財に

木曽川資料館（旧木曽川町会議事堂）

大正 13（1924）年に木曽川町会の議事堂として建設。隣接して木曽川町役場があった。現在は、山内一豊の関係資料などを展示する資料館（一宮市木曽川町黒田字宝光寺東）

先に文化審議会が、文部科学相に登録文化財の答申を行ったが、この中に

愛知県内の 6 件が含まれている。その内の半分、3 件は一宮市内の建物である。木曽川町資料館（旧木曽川町会議事堂）と「木曽川資料館収蔵室（旧木曽川町役場倉庫）、それに真清田神社本殿及び渡（わたり）殿である。

木曽川資料館は、鉄筋コンクリート 2 階建て。内部には傍聴席もあり、役場と独立した建物として議事堂が現存するのは、全国的にも珍しいという。

また同収蔵室は、土蔵造りのように見えるが実は鉄筋コンクリート造り。随所にトラスなどの近代西洋建築の技法が取り入れられている。

真清田神社本殿及び渡殿は木造平屋建て。柱と柱の間が 3 つあり、片方の屋根が長い「三間社流造」（さんげんしゃながれづくり）という様式。昭和 20（1945）年の一宮空襲で焼失したが、古い様式を踏襲して昭和 29 年に再建されたものだ。

指定文化財を補う登録文化財

登録文化財制度は、従来の文化財指定制度を補完する形で平成 8（1996）年に創設された。都市化によって明治以降の近代建築が取り壊される事態が相次いだことから、指定をまだ受けていない文化財の破壊をくい止めるのが目的だ。

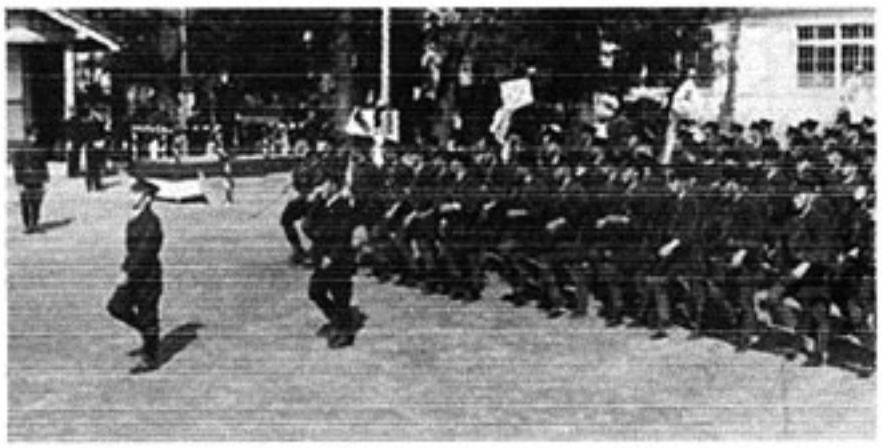
重要なものを厳選する文化財指定制度に比べ、規制がゆるやかなのが特徴。外観を除けば、内部などは自由に改装してもよく、より幅広く文化財を保護することができる。現在の登録物件は明治以降に建設されたものが中心だが、平成 16 年の法改正で、民俗文化財や史跡などの記念物にも対象が広がった。

今回の答申で、県内の登録文化財は 225 件、全国では 5,609 件となった。登録されるには所有者の同意が必要だが、相続税などで若干の優遇措置があるぐらいで「所有者にとって、文化財登録されることのメリットはあまりない」（愛知県教育委員会）とか。貴重な文化遺産を守るための施策の充実が望まれる。

2006 年 7 月号・50 号

地域の防災支える住民の献身的努力

一宮の消防・防災



一宮警察署長の前で行進する起町消防団（昭和 10 年代）

消防本部のある一宮消防署には、かつて高い火の見やぐら（正式には「望楼」と呼ぶ）が立っていた。地域のランドマークとして市民に親しまれてきたが。すでにその役割を終え、「倒壊の危険がある」ことから平成 15 年に撤去されている。

この消防本部の隣に市民防災センターがある。中にはかつての消防ポンプや纏（まとい）などが展示され、一宮の消防の歴史の一端を見ることができる。今回は消防の歴史を振り返ってみることにしよう。

日本の消防の歴史は江戸時代にさかのぼる。纏をシンボルとした「町火消」や「大名火消」などが、消防組織の始まりだといわれている。尾張藩でも寛文年間（1661 ～ 1673）に、町を単位とした6つの火消組合が組織され、町奉行などの指揮によって消火活動にあたったといわれている。

明治 7（1874）年には「消防規則」が制定。警察の指揮下で組織化が進められた。当時は、市町村が経費を負担する公設消防組と有志による私設の消防組などが混在し、消防組織は地域によってまちまちであった。

消防行政が統一されたのは 27 年の「消防組規則」制定後である。これにより公設、私設の別なく経費は市町村が負担し、警察が指揮監督するなどの消防制度が確立された。大正 8（1919）年には、東京、大阪に加え、名古屋、京都、横浜、神戸の 6 大都市に消防署が設置された。

昭和に入ると、消防組は各地の防護団と統合し警防団となる。警防団は戦時下では空襲による防火活動などに従事したが、戦後はこれが消防団となり、各市町村に設置された。

現在のような自治体消防が整備されたのは昭和 23（1948）年、「消防組織法」が施行されてからである。これにより消防は、明治以来の警察の指揮監督下から独立し、自治体の機関となった。各市町村には消防本部や消防署、それに非常勤の消防団が設置され、ここに現在の消防体制が確立されたのである。

一宮に消防本部が設置されたのは昭和 23 年。署員 18 名、消防車 2 台でのスタートであった。また旧木曽川町では 43 年に、旧尾西市では 35 年にそれぞれ消防本部が発足している。その後、合併にともなって一宮を本部に、木曽川、尾西の各消防本部はそれぞ木曽川消防署、尾西消防署となった。

この下に組織されているのが地域の消防団。現在、一宮、尾西、木曽川の 3 消防団の傘下に 30 分団（定員 610 人）が組織されている。しかし定員割れの分団も多く、他の地域消防団同様、ここでも人手不足が問題となっている。

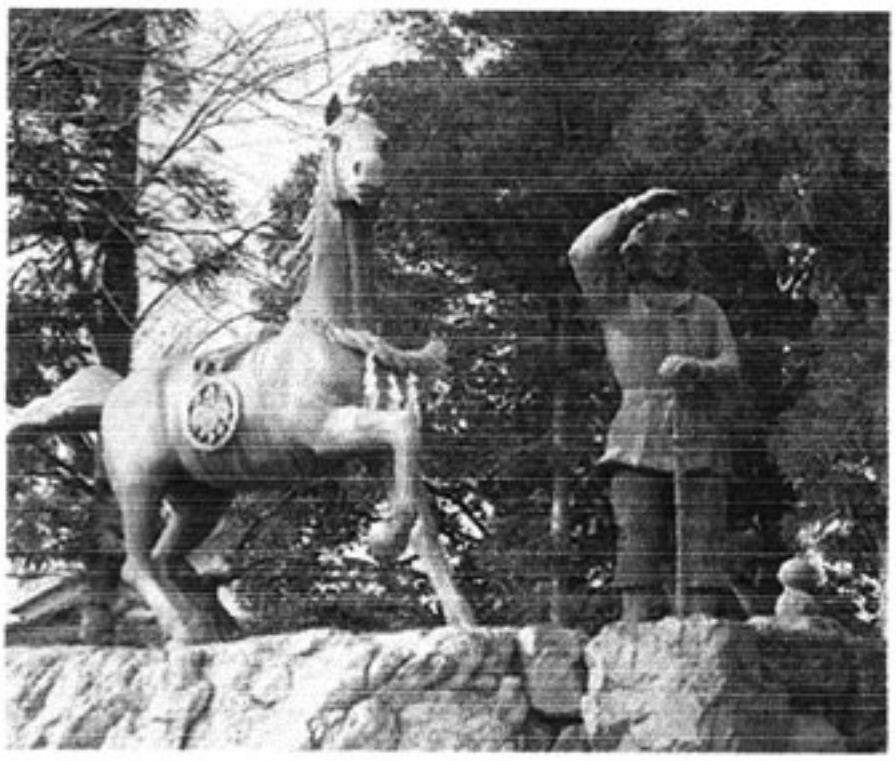
消防団の活動は、単に防火や消火だけにとどまらない。地震などの災害時活動など、その活動範囲は広く、いわば地域防災のかなめともいえる存在だ。こういった人々の献身的な努力で、今の地域防災は支えられているのである。

2006 年 4 月号・47 号

一宮に残る日本武尊伝説

「剣研石（けんとぎ）」と「笠懸の松」

剣を研いだ石と笠を懸けた松



更屋敷八剱社にある日本武尊の像／一宮市更屋敷

一宮市大和町戸塚に「七つ石」という史跡がある。大きな石が七つあることから、こう呼ばれるようになったという。ところでこの石は、別名「剣研石」とも呼ばれている。それは、日本武尊（やまとたけるのみこと）が、ここで剣を研（と）いだという伝説に由来するものだ。　日本武尊にまつわる史跡は、この「七つ石」の北にもある。ゴルフセンター西の大和町宮地花池にある「笠懸の松」である。日本武尊が伊吹山の荒ぶる神を平定に行く途中、「七つ石」で剣を研いだ後、ここで笠を松にかけて休憩したという。その際、ここに咲く蓮の花を愛でたとも伝えられている。　さらに一つ。木曽川町の北、更屋敷にある「八剱（はちけん）社」境内には、日本武尊の像がまつられている。この八剱社は、寛永 12（1635）年に名古屋の熱田神宮から分霊し創建されたのだという。祭神は熱田神宮と同じ日本武尊である。

では、この日本武尊とはどのような人物なのだろうか？

「記紀神話」に見る日本武尊

本武尊とは、『古事記』や『日本書紀』の神話に出てくる英雄のことである。日本武尊にまつわる神話は『古事記』も『日本書紀』も大筋は同じであるが、違う部分も多い。例えば、日本武尊は『日本書紀』による表記で、『古事記』では「倭建命」（やまとたけるのみこと）という。

二つの神話を総合すると、概略次のようになる。

日本武尊は 16 歳のとき、父より九州の熊襲建（くまそたける）兄弟の討伐を命じられる（『古事記』によるもので『日本書紀』では熊襲建ではなく川上梟帥（かわかみたける）となっている）。彼は少女に変装して熊襲の宴に忍び込み、スキをついて兄弟を刺殺する。

日本武尊はその後、東方制圧に出発。このとき伊勢神宮にあった神剣（草薙剣・くさなぎのつるぎ）を与えられる。相模の国で火攻めに遭うが草薙剣で草をはらい、迎え火によって逆に敵を焼き殺す。この帰途、尾張で美夜受媛（みやずひめ）と結婚する。

その後、草薙剣を美夜受媛に預けて伊吹山へ荒ぶる神の平定に向かう。しかしここで日本武尊は病身となり、大和を目指すが三重県亀山市の能煩野（のぼの）で 30 歳で死去する。死後は白鳥となって大和目指して飛んでいったという。

征服事業で生まれた架空の人物

以上が大ざっぱな概略だが、現在では日本武尊は 4 世紀から 7 世紀ごろの複数の英雄を具現化した架空の人物とされている。「大和の勇者」というような意味で、ヤマト政権による各地の征服事業を、日本武尊の英雄伝説に託したものだといわれている。

日本武尊にまつわる神社や伝説は、北海道と沖縄をのぞく日本中にあるという。各地に日本武尊伝説がある背景には、ヤマト政権による地方制圧があったのである。

なお、神話に登場する草薙剣は熱田神宮に祭られるが、僧道行によって盗まれ、その後は宮中に保管される。しかし、天武天皇の病気が草薙剣のたたりだとして、剣は再び熱田神宮に祭ら

れることとなった。熱田神宮には今でも「酔笑人神事（えようどしんじ・別名「オホホ祭」）」という行事があるが、これはこのときの剣の帰還をひそかに喜ぶものだという。

2006年5月号・48号

電　　話

誕生から130年、今や生活必需品に

起の印刷会社に設置された電話（大正 9 年）

「ワトソン君、ちょっと来てくれたまえ」。これは明治 9（1876）年、グラハム・ベルが最初に電話で発した言葉である。以来、電話は世界中で急速に普及していった。そこで今回は電話の歴史をたどってみることにしよう。

まずは電信から。日本の電信は嘉永2（1849）年、佐久間像山が日本で初めて電信機を自作したのに始まる。その後、明治2年10月には明治政府が、横浜一東京間での電信線建設工事に着手。着工日を太陽暦に直すと 10 月 23 日にあたるため、この日が「電信電話記念日」となっている。

その後、政府は電信網の全国展開を押し進め、その結果、明治 14 年ごろには主要な電信網が完成。明治 18 年には通信省が設置され、郵便と電信が統合された。

一方、電話はベルが電話機を発明した翌年の明治 10 年には、政府がすでにこれを輸入。実験を経て官庁や警察、鉄道などに使用していった。明治 22 年には東京一熱海間で商用の電話実験が行われている。

その後、電話網は全国に拡大。電話設置の請願も各地で行われ、この地方では明治 31 年に名古屋交換局が設置されている。さらに36年に一宮など3カ所に特設電話が設置され、電話交換業務が開始された。

一宮の電話加入者数は 70 名でスタート。以後、加入者数は急増し明治40年には171、大正8（1919）年には446に増加している。また大正3年には木曽川町にも電話線が設置。翌年には、加入者数 26 名で電話交換業務が開始されている。

当時の電話料金は地域によって異なっていたが、名古屋では年額 54 円でかけ放題。しかしこれは当時としては高額で、加入者は銀行、新聞社、商家などに限られ、一般市民には高嶺の花であった。

一般市民にも利用できるようにと、交換局の構内に電話所を設置したのが公衆電話の始まりである。この後、ボックスに入った公衆電話「自働電話」が登場。利用するたびに料金のかかる度数制の採用により、庶民の電話として定着していった。

戦後になると、郵政省と電気通信省ができ、郵便局内に電報電話局が設置された。昭和 27（1952）年には「日

本電信電話公社（電電公社）」が誕生。気象予報や時報などの情報提供サービスも始まり、電話の役割は拡大していった。

さらに昭和 60 年には電電公社が民営化され、「日本電信電話（株）（ＮＴＴ）」が誕生。新規参入業者も現れて、電話事業は競争時代を迎えた。また、電話機も携帯電話が主流となり、今や一人一台の時代。その登場から 130 年、高嶺の花だった電話は生活必需品となったのである。

2006 年 3 月号・46 号

オンコロコロセンダリマトウギソワカ
薬つぼを持った病気治療の仏様　薬師如来

禅林寺の薬師如来像。左手に薬つぼを持つ寄木造りの像で、国指定重要文化財（一宮市浅井前林）

一宮市浅野前林にある禅林寺は天禄元年（970）創建と伝えられる曹洞宗の寺院。ここには高さ 1 メートル 24 センチの寄せ木造りの薬師如来（やくしにょらい）像が伝えられている。この薬師如来像は、国の重要文化財にも指定された貴重なものである。

禅林寺はまた、20 年ほど前に発足した「東海四十九薬師霊場」の第十二番札所でもある。「薬師信仰」を広めることを目的とした東海四十九薬師霊場には、愛知、岐阜、三重、静岡各県の薬師如来をまつる由緒ある寺院が結集している。

霊場巡りは、三重県名張市の第一番札所・福成就寺を皮切りに第四十九番札所・愛知県東海市の普済寺までを巡るもの。一宮近郊では禅林寺以外に、江南市の本誓院などが名を連ねている。

このような薬師巡りというのは全国各地にある。では、このように各地で崇敬される薬師如来とはどういう仏様なのであろうか？

薬師如来は、正式には「薬師瑠璃光（るりこう）如来」といい、阿弥陀（あみだ）如来などと同じ如来のひとつ。如来とは「悟りを得た者」という意味で、仏（ほとけ）と同義語である。左手に薬つぼを持つのが一般的だが、奈良・唐招提寺のように、薬つぼを持たないものも多い。

庶民に「おやくしさん」などと呼ばれて親しまれ、病気治癒をつかさどる仏様とされてきた。ではなぜ、この薬師如来が病気治癒の仏様として人々に信仰されるようになったのだろうか？

その理由は、薬師如来が修行中、苦しむ人々を救うため自ら立てたという「十二の大願」にある。

「十二の大願」の多くは人々に悟りを開かせるためのものだが、その中に病苦にある人や医者から見放された人の病による苦痛を取り除き、寿命を延ばして心身ともに安楽にするという願

いが含まれている。このため薬師如来は、古来より病を治し薬を与える医療の仏様として信仰を集めてきたのである。

またこのほか、大願には「諸々の事業を成就させる」ことや「香味の食をもって飽食せしめ、衣類のない者にも必要な衣服や装身具を施す」などの現世利益的な願いが含まれている。これが現世利益信仰の強い日本で、極楽往生を約束する阿弥陀如来とともに、薬師如来信仰が人々の間に根付いていった理由である。

薬師如来は奈良の法隆寺金堂や唐招提寺、薬師寺など、全国の寺院に国宝クラスの像がまつられている。病に対する人々の恐怖と、それを癒してくれる薬師如来への信仰の強さを物語るものであろう。

季節はもう春。薬師真言の祈りのことば「オンコロコロ　センダリ　マトウギ　ソワカ」をとなえつつ、各地の薬師如来を訪ねてみるのもいいだろう。

2006年2月号・45号

宝船に乗ってやって来る七福神の正体とは？

戦後、市神堂は再建され、市神寺としてスタートした。恵比寿、大黒天が今もまつられている（一宮市白旗通）

新春恒例の「なごや七福神まつり」が、今年も三越名古屋栄店で行われた。名古屋市内の七つの寺にまつられている七福神が一同に勢ぞろいするものだが、この地方でもかつて「尾西七福神」と呼ばれるものがあったといわれる。

それは市神寺の恵比寿（えびす）、大徳院の大黒天（だいこくてん）、真清田神社の弁才天（べんざいてん）、宝寿院の毘沙門天（びしゃもんてん）、妙興寺の布袋（ほてい）、寿福寺の福禄寿（ふくろくじゅ）、信行寺の寿老人（じゅろうじん）という構成だったという。

福をもたらすといわれる七福神は、今では先の七神とされるが、かつては寿老人と福禄寿が同一視され、代わりに吉祥天（きっしょうてん）や猩猩（しょうじょう）が加えられた時期もあった。絵の題材として好まれた「竹林の七賢人」にならって七福神とされ、室町時代にその原型ができたという。

江戸時代になると各地で七福神巡りが行われたり、正月に宝船に乗った七福神の絵を枕の下に入れると、よい夢が見られるといわれるようになる。こうして福の神が、宝船に乗って海の彼方から富をもたらすというイメージができあがった。

七福神巡りは全国にあるが、この時、自分の家に一番近い所から反時計回りに二番目の所より順に回っていき、最後に一番近い所で終わるとよいといわれている。正月にまいりそびれた人も一度、足を運んでみてはいかがだろう。福の神がやって来るかもしれない。

恵比寿

もとは漁業・大漁の神。神話の蛭子と

同一視

恵比寿は、関西では「えべっさん」と呼ばれ、商売繁盛の神として親しまれている。しかし、その語源は異邦人をさす「エミシ・エビス」からきており、外界から福をもたらす神と考えられていた。釣り竿を持ちタイを抱えた姿からもわかるように、もともとは大漁をもたらす漁業の神であった。

その中心が兵庫県西宮市にある西宮神社。祭神は蛭子（ひるこ）大神という、イザナギとイザナミの子。障害があったために船で流され、それが流れ着いて西宮神社の祭神になったという。海からやってくる神ということから、次第に恵比寿と蛭子は同一視され、それが商業の発展とともに、商売の神として信仰されるようになったといわれる。

大黒天

もとはインドの破壊神。大黒柱はここから　大黒天は、もともとインド・ヒンズー教のシヴァ神の化身で破壊と戦闘の神。その姿は憤怒の顔をしたおそろしいものだったが、日本に伝わり、大国主命（おおくにぬしのみこと）信仰と合体したため、その表情も福々しいものとなった。合体は大黒と大国の音が似ているためといわれる。

また天台宗では大黒天を台所の神として日本に伝えたため、かまどの神として定着。米俵にすわるスタイルができ、さらに福の神として農耕の神ともなった。ちなみに「一家の大黒柱」というのは、昔、家を建てる際、台所に隣接する大きな柱に大黒天をまつったことからきている。

弁才天

もとはインドの川の神。今では音楽から蓄財まで

弁才天も、もとはインドの女神・サラスヴァティが原型。ブラフマー（梵天）の妻でもある川の神で、川の流れる音が音楽にたとえられ、音楽の神となり、さらに学問の神ともなった。日本には奈良時代に伝わり、もとが川の神ということから、水辺にまつられるようになった。

江戸時代に入り七福神巡りがブームになると、弁才天の「才」が「財」と読み替えられ、「弁財天」として蓄財の神としても信仰されるようになった。これでよく知られるのが各地にある「銭洗（ぜにあらい）弁天」である。水の神と蓄財の神が結びついた信仰だ。

毘沙門天

もとはインドの四天王。鎧武者姿の戦闘の神

七福神の中で一人だけ鎧（よろい）武者姿の毘沙門天は多聞天ともいい、もとはインドの四方を守る四天王の一人で北方を守る神。仏教の伝来とともに日本に伝わり、戦闘の神として信仰されるようになった。楠木正成や上杉謙信などは、自らを「毘沙門天の生まれ変わり」と称している。

この戦闘の神がどうして福の神となったかはよくわからない。インドで蓄財の神・ケベーラと同一視されたからという説もある。ちなみに妻は、七福神に数えられたこともある吉祥天。踏んづけているのは天邪鬼（あまのじゃく）という仏教の敵である。

布袋は七福神の中で唯一の実在した人物。中国唐代末期の禅僧・契此（かいし）がモデルだという。この僧は大きな腹をして、いつも大きな布袋を持

ち歩いていたという。

お布施をこの布の袋に入れていたことから布袋という呼び名がついたといわれ、その後、弥勒菩薩（みろくぼさつ）の化身として信仰されるようになった。その福々しい姿から七福神に加えられ、ユーモラスな姿は水墨画の題材として愛好された。

福禄寿・寿老人

影の薄い長寿の神。同一視されたことも　長寿の神、福禄寿と寿老人は、ほかの神に比べて影が薄い。同一視された時期もあり、七福神以外に単独で信仰されることはほとんどない。

どちらも中国の神で、いわば仙人のような存在。禅宗の伝来とともに日本に伝わったという。いずれも南極星の化身で、インドでは地平線ギリギリに見え、この星を見ることができたら長生きするという伝説がある。

2006年1月号・44号

金毘羅船々～
庶民に根付く金比羅信仰

「金毘羅船々」と「石松代参」

大正初めごろの「金比羅参り」の服装。げたやわらじをはいて歩いたという）

「♪金毘羅（こんぴら）船々　追風（おいて）に帆かけて　シュラ　シュ　シュ　まわれば四国は讃州（さんしゅう）　那珂（なか）の郡（ごおり）　象頭山（ぞうずさん）金比羅大権現～♪」

これは香川県の有名な民謡『金毘羅船々』の一節である。ここで歌われている金毘羅大権現は、「金比羅さん」の愛称で知られる海の安全の神様。その総本山は、香川県仲多度郡琴平町の琴平山（象頭山）にある金刀比羅（ことひら）宮である。社名は「金比羅」や「金比良」「琴平」などとも呼ばれる。

「飲みねえ、飲みねえ。鮨食いねえ。江戸っ子だってね～」のやりとりで有名な浪曲『石松代参　三十石船』も、金比羅信仰にまつわる話だ。清水次郎長が敵討ち成就のお礼として、日ごろから信仰する金刀比羅宮に、代役として子分・森の石松を差し向けたときの話である。

民謡にうたわれたり、浪曲の舞台になるほど、金比羅信仰は古くから庶民の間に根付いていた。では、この金比羅信仰とは、いったいどういうものなのだろうか？

金比羅はガンジス川のワニ

金比羅は、もともとサンスクリット語で「クンビーラ」と呼ぶインドの神様である。ガンジス川に住むワニを神格化したものだという。このクンビーラがなぜ、金比羅になったのか。

琴平山に松尾寺という薬師如来を本尊とする真言宗の寺がある。明治の神仏分離以前は、ここに大物主神（おおものぬしのかみ）を祭神とする金刀比羅宮もまつられていた。この松尾寺の薬師如来を守る十二神将のうちの一つに宮毘羅（くびら）大将、すなわちク

ンビーラがある。そこでこの金刀比羅宮とクンビーラの発音が似ていることから、近世になって結びつけられたのだといわれている。ただし金比羅の語源についてはよくわかっていない。

また、インドでは、クンビーラの宮殿が象頭山にあったということから、金刀比羅宮のある琴平山も別名・象頭山と呼ばれるようになった。こうして明治以前の神仏習合思想のもと、金比羅大権現として信仰されるようになったという。

金比羅は海上安全の神様

室町時代以降になると、瀬戸内海の海上運行が盛んになり、同時に海賊も横行し始める。こうした背景を受け、海の神としての金比羅が信仰されるようになる。もともとガンジス川のワニを神格化したものだけに、水に関係する神として金比羅が信仰されたのである。山の上にある金刀比羅宮は沖合の船からは目印の役割も果たしたという。

江戸時代になると、さらに海上航路が拡大し、金比羅信仰は全国へ広がっていった。金比羅信仰が全国に広がるにつれ、海の神様以外の要素が加えられるようになる。疫病除けや盗難除けなど、さまざまなご利益が加味されていったのである。

また、各地で金比羅講が組織され、代表が交代で参けいする「代参」が盛んに行われるようになる。資金を積み立て、村の代表者が毎年交代で金刀比羅宮に代参したという。こうして人々の間に金比羅信仰は広がり、各地に金比羅社がまつられるようになった。

明治時代になると、神仏分離令が出され、松尾寺とは切り離されて現在の金比羅宮が成立。寺とは無関係の神社となったのである。